29『ナツヤスミ語辞典』成井豊

○ジャンル／ファンタジー
○ストーリー／カブト・ヤンマ・アゲハは中学２年。夏休み、水泳嫌いのヤンマは、水泳の補習に出るのがいやで、プールの水を抜いてしまう。罰として、プール掃除を命じられたヤンマに、カブトとアゲハも付き合うことに。そこへ、白い服を着た男が現れ、3人に話しかける。男はウラシマと名乗り、カブトが持っていたカメラで写真を撮る。その晩、カブトが現像してみると、そこに写っていたのは15年前の景色だった……。
○出演者／男７＋女11＝計18
○上演時間／１２０分

登場人物

カブト（中学２年）
ヤンマ（中学２年）
アゲハ（中学２年）
クサナギ（俳優・元産休代用教員）
ウラシマ
ナナコ
ムロマチ（カメラマン）
アヅチ（ムロマチのアシスタント）
モモヤマ（ムロマチのアシスタント）
ミドリ先生（英語科教諭・カブトの担任）
アオタ先生（体育科教諭）
カニタニ（中学２年）

サルサワ　（中学２年）
ウスイケ　（中学２年）
ヤンマの母（魚屋）
アゲハの母（女優）
駅長
郵便屋

カブトがやってくる。地面に、麦わら帽子が落ちていることに気づく。周囲を見回す。麦わら帽子に歩み寄り、拾い上げる。と、その下に、カメラが置いてあった。カブトがカメラを持つ。ファインダーを覗き、シャッターを切る。

そこへ、たくさんの人々がやってくる。カブトのそばを次々と通りすぎる。カブトは一人一人にカメラを向け、シャッターを切る。

そこへ、ウラシマがやってくる。カブトはウラシマにカメラを向ける。が、ウラシマはカブトに背を向けて、シャッターを切らせない。カブトがウラシマに呼びかける。が、ウラシマは行ってしまう。

ウラシマ以外の大人たちも、みんな去る。カブトの周りには、中学生五人だけが残る。

そこへ、ミドリ先生がやってくる。

ミドリ先生　大掃除は終わったか！

六人　オー！

ミドリ先生　机の中も空っぽにしたか！

六人　オー！

ミドリ先生　教科書もテストも、給食の残りのカビの生えたパンも入ってないな？

六人　オー！

ミドリ先生　通信簿も、忘れたフリして、置きっ放しにしてないな？

六人　オー！

後にどんな悲劇が待っていようと、ちゃんとお母さんに見せるんだぞ。

ミドリ先生　オー！

六人　それじゃ、これで一学期はおしまい。学級委員の号令で、気をつけ、礼をした瞬間から、待ちに待った夏休みの始まりです。ウスイケさん。

ミドリ先生　気をつけ。礼。

ウスイケ　ってウスイケさんが言うまでは、まだ夏休みは始まりません。

ミドリ先生　先生、早く礼をしましょう。

カニタニ　カニタニさん、焦っちゃダメ。夏休みはすぐそこまで来てるんだから。

ミドリ先生　でも、私、もう待てません。

カニタニ　どうして？

ミドリ先生　だって、私、この日が来るのを、一年も前から待ってたんです。去年の九月一日から、次の夏休みまであと三二六日、あと三二五日って。

カニタニ　そして、今日が最後の一日。あとほんのちょっと我慢すれば、夏休みが始まるのよ。うれしいでしょう？　うれしいでしょう？　うれしいでしょう？

六人　うれしいです！

ミドリ先生　わかる。みんなの気持ち、よくわかる。ウスイケさん。

ウスイケ　気をつけ。礼。

ミドリ先生　ってウスイケさんが言う前に、一言だけ、みんなに言っておきたいことがあります。

カニタニ　もう、早くしてくださいよ。

ミドリ先生　そんなふうに夏休みが待ち遠しいって思えるのも、もしかしたらこれが最後。来年の夏休みは、誰も待ち遠しいとは思わないでしょう。なぜなら、三年生は受験の季節。夏休みだって、毎日毎日勉強で、遊んでる暇なんか一日もな

いんです。
アゲハ　いいえ、私は来年も遊びます。
カニタニ　そんなことを言ってる余裕があるのかしら。今の成績で。
アゲハ　あら、国語のテストが十八点だった人に、とやかく言われたくないわ。
カニタニ　何だと？
ミドリ先生　だから、やっぱり今年が最後。最後だから、学校とか宿題とかこれからの人生とか、面倒臭いのは全部押入れに放り込んで、一夏まるごと遊んでやれ！
六人　オー！
ミドリ先生　と思ったのが、転落への第一歩。統計によりますと、十代の少年少女が最も非行に走りやすい季節がなんと、中学二年の夏休み。今年の夏は、人生八十年の中で、一番危険な夏なんです。危険な夏休みを安全に過ごすには、どうしたらいいか。私が出した答えは、夏休みの計画表。さあ、みんな、持ってきて！

六人が奥へ走り去る。

ミドリ先生　計画表なんて、普通は小学生が書くものかもしれません。でも、暴走族に入って、警察に補導されてから、「あの時、計画表さえ書いておけば」って後悔しても遅いんです。備えあれば憂いなし！

六人が戻ってくる。手には、大きな白い紙を筒形に巻いたもの。ミドリ先生の合図で、六人が紙を広げる。夏休みの計画表が、色とりどりに描いてある。

ミドリ先生　それじゃ、まずはヤマダさんの計画表から見せてもらいましょうか。

ヤンマが前に出る。他の五人は座る。

ミドリ先生　えーと、七月二十一日、こころ、羅生門、黒い雨。二十二日、ハムレット、罪と罰、若きウェルテルの悩み。何よ、これ。本の題名ばっかりじゃないの。新潮文庫の百冊です。

ヤンマ　まさか、一夏で百冊制覇するつもり？

ミドリ先生　一日に三冊読めば、十分可能な数字です。

ヤンマ　中には読まなくていい本もあると思うけど。まあ、ヤマダさんの健闘を祈りましょう。それじゃ、次はオオシマさん。

アゲハが前に出る。ヤンマは座る。

ミドリ先生　えーと、七月二十一日、築地本願寺。二十二日、増上寺、寛永寺、浅草寺、柴又帝釈天。今度はお寺の名前ばっかり。まさか、これ全部お参りしようって言うの？

アゲハ　お参りじゃなくて、幽霊に会いに行くんです。

ミドリ先生　幽霊に？　ちょっと待ってよ。いくら夏は幽霊の季節だって言ってもね、昼間からは出ないわよ。

アゲハ　よく見てください。この表は、夜の六時から朝の六時までのスケジュールなんです。

ミドリ先生　一夏丸ごと夜遊びするわけ？

アゲハ　遊びじゃありません。研究です。ムロマチさんにカメラを借りて、ちゃんと写真も撮ってきます。先生にも一枚あげましょうか？

ミドリ先生　写真より、計画表がもう一枚ほしいな。朝の六時から始まる計画表が。

アゲハ　それだと、睡眠だけになっちゃうんですけど。

ミドリ先生　だったら、計画そのものを変えなさい。おいおい、もっとまともなのはないのかよ。

カニタニ　私のはまともです！

サルサワ　私も！

ウスイケ　私も！

カニタニ・サルサワ・ウスイケが前に出る。アゲハは座る。

ミドリ先生　あら、本当。宿題、部活、おうちのお手伝い、ちゃんと四十日全部埋めてあるわね。これは三人ともハナマルかな。

アゲハ　でも、これ、みんな、字が同じ。

カニタニ　バカヤロー！

ミドリ先生　カニタニさん、この三枚は誰が書いたの？

ウスイケ　（手を挙げて）私です。

ミドリ先生　ウスイケさん、学級委員のあなたが、どうしてこんなことをしたの。

ウスイケ　計画表を書くのが楽しくて、つい他の人の分まで書いちゃったんです。

ミドリ先生　わかる。あなたの気持ち、よくわかる。でもね、カニタニさんの夏休みは、カニタニさんのもの。サルサワさんの夏休みは、サルサワさんのもの。あなたが計画を立てられるのは、あなたの夏休みだけなのよ。

カニタニ　だから、計画を立てたのは私たちで、ウスイケさんには口述筆記をしてもらったんです。

ミドリ先生　自分のことは自分でやるの。あなたの夏休みでしょう？　カニタニさん、サルサワさん、それからオオシマさん、今日は全部書き直してからでないと、帰れませんからね。それまで、夏休みはお預けよ。

カニタニ　そんなあ。

ミドリ先生　あれ？

ミドリ先生がカブトに歩み寄る。

ミドリ先生　ムロマチさん、あなた、何にも書いてないじゃないの。

カブト　はい。

ミドリ先生　はいじゃないでしょう。どうして計画を立てようとしないの。

カブト　計画は立てました。

ミドリ先生　立てたなら、書けばいいでしょう。

カブト　書けないんです。

ミドリ先生　どうして。

カブト　何が起こるかわからない、そんな夏休みにしたいと思ったから。

ミドリ先生と六人の中学生が去る。

松葉杖をついて、クサナギがやってくる。

クサナギ　人間の体が、こんなに壊れやすいものだとは思いませんでした。刑事ドラマの犯人役で、東京駅のロケ。階段をタッタッターッて駆け降りて、一瞬後ろを振り返るってカットだったんですけど、途中で一段踏み外したんですね。危ない、危ないって思いながらも、勢いがついてるから止まれない。あれはもう、駆け降りるっていうより、空中でもがいてるって感じでした。しかし、僕は最後まで諦めなかった。残り五段てところで、一気にタンッて跳んだんです。着地は見事に決まりました。タンッて跳んで、ブチ。イヤな音だった。アキレス腱て太いですからね。カメラさんにもよく聞こえたそうです。カッコよく着地して、カッコよく振り返ろうと思ったのになあ。顔のアップなんて、そのカットだけだったから。こうして、大学卒業以来、久しぶりの夏休みがやってきたわけです。

クサナギが座る。そこへ、郵便屋が自転車に乗って、やってくる。

郵便屋　（周囲を見回して）あの、こちらのお宅の郵便受けは？

クサナギ　遅い。

郵便屋　は？

クサナギ　遅いって言ったんだよ。本当なら、その手紙は一週間も前に届くはずだったんだ。それを、今日まで待たせやがって。どうしてこんなに遅くなったんだ。理由を説明しなさい。

郵便屋　そう言われても、僕にはちょっと。

クサナギ　まさか、わざと遅らせたんじゃないだろうな？

郵便屋　わざと？

クサナギ　僕に意地悪するためにさ。僕がいつも郵便番号を書かずに手紙を出すから、仕返ししてやろうって。

郵便屋　郵便局がそんなみみっちいこと、するわけないでしょう。

クサナギ　いや、わからないぞ。お年玉つき年賀ハガキだって、今年は一つも当たらなかったし。僕に届いたハガキの番号をメモしておいて、わざとハズレにしたんだろう。

郵便屋　バカなことを言わないでください。配達が遅くなったのは、郵便局のせいじゃありません。消印だって、昨日の日付になってますし。

クサナギ　消印までごまかすとは、手が込んでるな。

郵便屋　ごまかしてませんて。

クサナギ　あくまでシラを切るつもりか。まあ、今日のところは許してやろう。結局、手紙は届いたわけだし。ほら、早くこっちへ持ってきなさい。

郵便屋　先を急いでるんですよ。自分で取りに来てください。

クサナギ　遅くなって悪かったと思ってるなら、ここまで持ってこいよ。

郵便屋　別に悪かったとは思ってません。

クサナギ　お、居直るのか？

郵便屋　だって、悪いことは何もしてないんですから。僕は郵便配達の仕事に誇りを

クサナギ　持っています。目標は宇宙一の郵便屋です。
それなら、配達される人のことも、少しは考えたらどうだ。（松葉杖を見せる）
郵便屋　なんだ、怪我をしてたんですか。
クサナギ　宇宙一の郵便屋なら、体の不自由な人のために、家の中まで持ってきてくれてもいいんじゃないか？
郵便屋　それくらいは当然のことですよ。（クサナギに歩み寄り、封筒を差し出して）どうぞ。
クサナギ　（受け取って）ヤマダミユキ？　誰だよ、この人。
郵便屋　知りませんよ。
クサナギ　僕だって、知らないよ。僕が待っていたのは、こんな手紙じゃない。さっさと持って帰ってくれ。
郵便屋　そんなことできませんよ。
クサナギ　子供の頃、お母さんに言われなかったか？　知らない人から物をもらっちゃいけませんって。
郵便屋　でも、これ、女の人じゃないですか。いくら知らない人だって、若くてキレイで独身だったら、話は別でしょう。
クサナギ　名前だけで、どうしてわかるの？
郵便屋　理由は特にありませんけど、僕は手紙のプロですから。
クサナギ　バカなことを言うな。あっ！
郵便屋　もしかして、思い出したんですか？
クサナギ　ヤンマだ。そうだ、ヤンマだよ。確かに、若くて独身だ。でも、あれがキレイって言えるかな。

郵便屋　知ってる人だったら、別に汚くてもいいじゃないですか。
クサナギ　汚いなんて失礼だな。この子は僕の教え子なんだぞ。こう見えても、僕は元教師なんだ。教壇に立ったのは、半年だけだったけど。ほらほら、産休代用教師っていたろう？　あれで突然、担任になった。五年三組。やかましいクラスだった。その中でも特にやかましかったのが、このヤンマでさ。あれからもう三年か。

郵便屋　あの、そろそろ次の家へ行きたいんですが。
クサナギ　もう少しいいじゃないか。今、麦茶をいれるから、一休みしていけよ。
郵便屋　まだ仕事がたくさん残ってますんで。
クサナギ　でも、外は暑いだろう？　麦茶、よく冷えてるよ。砂糖が入ってるのと入ってないのと、二種類あるんだよ。どっちがいい？

郵便屋　お気持ちはうれしいんですが、仕事をサボるわけにはいきません。
クサナギ　そんなに固いこと言わないで。
郵便屋　僕は宇宙一の郵便屋ですから。

郵便屋が自転車に乗って、去る。

クサナギ　宇宙一の郵便屋か。僕には「誇りある俳優」なんて言えないな。怪我をした俳優なんて、何の使い道もないんだから。一人で部屋に閉じこもってると、とっても不安になるんです。このまま一生、役がもらえないんじゃないかって。せっかく先生を辞めて、俳優の道を選んだのに。そんな時に届いた手紙。

クサナギが椅子に座り、手紙を開く。

クサナギ　「暑中お見舞い申し上げます。お久しぶりです、先生。私のこと、覚えてますか？」。覚えてますよ。お勉強が大好きで、すぐにその場で答えられないような難しい質問をいっぱいしてくれた、ヤンマくん。「そうです。ヤンマです。やっぱり覚えていてくれましたか。まあ、あれから三年しか経ってませんからね。覚えてなかったら、人間失格ですよ」。こういうところが憎たらしいんだよな。「私は今、太宰治の『人間失格』を読んでいます。私はいつも小説を読む時、登場人物を俳優に当てはめて読むんですけど、この小説の主人公は先生にしました。先生も一応、俳優でしょう？」。一応とはなんだ、一応とは。どうせ主人公にするなら、『源氏物語』にでもしてほしかったな。「さて、こうして久しぶりに手紙を書いたのは、別に先生が好きだからじゃありません。国語の宿題が、先生に手紙を出す、必ず封書で、原稿用紙三枚以上って訳のわからないやつで、どの先生に出せって書いてないから、クサナギ先生にしたのです」。そんなの、国語の先生に決まってるじゃないか。「後で文句を言われたら困るので、先生の方から確かに届いたって連絡しておいてください。それでは、さようなら」。さようなら？（二枚目を見る）「と、これで終わってしまっては、枚数が足りません。今日の出来事でも書いて、無理矢理三枚にしましょう。今日は体育の補習で、午後から学校へ行きました」

別の場所に、ヤンマが現れる。

ヤンマ　体育の補習は水泳です。二十五メートル泳げない人は、泳げるようになるま

で、この補習に通わなければいけません。
クサナギ　中学生にもなって、泳げない子なんているのかね。
ヤンマ　ちなみに、私は五メートルしか泳げません。
クサナギ　五メートルじゃ、泳げるうちに入らないよ。
ヤンマ　水の中でもがいてもがいて、もう息が苦しい、我慢できないって足を着けると、なぜか五メートル進んでいるのです。でも、私は別に泳げるようになりたいとは思いません。
クサナギ　どうして？
ヤンマ　人間は陸上動物です。二本の足は、陸地を歩くためにあるのです。せっかく進化して、水から上がってきたのに、またわざわざ水の中に戻ることはないのです。
クサナギ　でも、もし溺れたら、どうする？
ヤンマ　私はお風呂以外の水には絶対に近付きません。だから、溺れる心配なんて、する必要なし。
クサナギ　僕が読んでどう思うか、わかってるみたいだな。
ヤンマ　でも、補習に出ないわけにはいきません。そこで第一日目の今日は、カブトとアゲハに付き合ってもらいました。

そこへ、カブト・アゲハが飛び出す。後を追って、アオタ先生・カニタニ・サルサワ・ウスイケが飛び出す。

アオタ先生　ヤマダ、おまえはそんなに先生が嫌いか。
ヤンマ　別に、先生のことは嫌いじゃありません。

アオタ先生　じゃ、好きか？
ヤンマ　私は水泳が嫌いなんです。でも、補習にはちゃんと来ました。
アオタ先生　中止になるってわかってるから、来たんだろう。
アゲハ　え？　補習は中止なの？
サルサワ　プールの水がないのよ。
ウスイケ　（アゲハに）昨夜、誰かが学校に忍び込んで、プールの水を抜いちゃったらしいの。
サルサワ　（アゲハに）そうとも知らずに、アオタ先生ったら、いきなり飛び込んじゃって。
アゲハ　だから、頭に包帯を巻いてるんだ。
アオタ先生　誰の仕業か、先生には大体見当が付いている。
ヤンマ　私がやったって言うんですか？
アオタ先生　誰とは言わない。先生は、本人が正直に言ってくれるのを待ちたいと思う。
カニタニ　ヤマダさん、先生が怒り出す前に、謝ったらどう？
アゲハ　どうしてヤンマがやったって決めつけるの？
カニタニ　私たち三人がやってないのよ。残りはヤマダさんしかいないでしょう？
アゲハ　カニタニさんがやってないって証拠はあるわけ？
カニタニ　証拠はないけどさ、昨夜のうちに水を抜いておいて、素知らぬ顔で補習に来るなんて、絶対に極悪人の仕業よ。その点、私は、クラスの悪を取り締まる風紀委員。
サルサワ　私は病を取り締まる保健委員。
ウスイケ　私はその他すべてを取り締まる学級委員。
三人　三人合わせて、二年Ａ組のチャーリーズ・エンジェル。

カニタニ　だから、犯人はヤマダさんなのよ。
アオタ先生　先生は、本人が正直に言ってくれるのを待ちたいと思う。
カニタニ　ほら、ヤマダさん、先生がさっきから、待ちくたびれてるわよ。
ヤンマ　先生は、私がやったって思ってるんですね？
アオタ先生　先生は何も思ってない。ただひたすら待ってるんだ。
ヤンマ　でも、さっき、中止になるってわかってるから来たんだろうって言いましたよね？
アゲハ　言った言った。私、覚えてる。
ヤンマ　（アオタ先生に）先生が生徒を疑っていいんですか？
アゲハ　（アオタ先生に）ヤンマのことを疑っておいて、ヤンマが犯人じゃなかったら、どうするんですか？
アオタ先生　アオタ先生、ピンチ！

クサナギが拍手する。

クサナギ　そうだそうだ。生徒を信頼しないで、何が教師だ。思春期の女の子は傷つきやすいんだぞ。これで、ヤンマが転落への第一歩を踏み出したら、どうするんだ。
ヤンマ　クサナギ先生はどう思いますか。
クサナギ　僕はもちろんヤンマの味方さ。僕の知ってるヤンマに、そんな悪いことはできない。
ヤンマ　本当にそう思いますか？
クサナギ　僕はヤンマを信頼してるんだ。犯人は、そのカニタニって子だろう。勉強は

できなくても、悪いことには知恵が回りそうだ。
だから、半年でクビになるんです。犯人は私です。

ヤンマ　エーッ！

クサナギ　ヤンマ、そろそろ本当のことを言えよ。

カブト　何よ。カブトまで、私のことを疑うの？

ヤンマ　だって、ちょっと考えれば、わかるじゃないか。おまえは手ぶらで学校に来た。水着を持たずに。

カブト　いけね。忘れてきちゃった。
水泳の補習に、水着を忘れるバカがいるかよ。中止になるってわかってたから、持ってこなかったんだろう？

アオタ先生　（ヤンマに）やっぱり、おまえがやったのか？

ヤンマ　そうです。私が水を抜いたんです。

アオタ先生　そうか。一時はどうなることかと思った。一瞬、辞表を書いてる自分の姿が目の前にちらついてしまった。

カニタニ　（ヤンマに）やっぱり、私の言った通りじゃないの。

アオタ先生　カニタニ、そんなにムキになるな。確かに、ヤマダのしたことは悪いことだが、最後は自分から正直に言ったじゃないか。正直な人間を責めることは、誰にもできないぞ。

サルサワ　それじゃ、もう怒らないんですか？

ウスイケ　（アオタ先生に）ヤマダが来たら、俺みたいに、空のプールに飛び込ませてやるって言ってたじゃないですか。

アオタ先生　怒らないが、反省はしてもらう。せっかくプールの水を抜いたんだ。ついでに、プールの掃除をしていってもらおう。

カニタニ　なるほどね。
アオタ先生　ムロマチとオオシマもやっていくだろうな？
アゲハ　どうして私たちまで？
カニタニ　犯人を庇っただろう？　おまえらだって、共犯なんだよ。

サルサワ・ウスイケがデッキブラシを三本持ってくる。カブト・ヤンマ・アゲハに押しつける。

アオタ先生　俺たちは体育館へ行って、バスケットをやろう。ウスイケ、おまえは図書室に寄って、ミドリ先生を呼んでこい。教員チームと生徒チームで、対決だ。
ウスイケ　ミドリ先生がやりたくないって言ったら？
アオタ先生　その可能性は全くない。なぜなら、おまえが命懸けで説得するからだ。よし、行くぞ。

アオタ先生・カニタニ・サルサワ・ウスイケが去る。

クサナギ　「自分で蒔いた種は、自分で刈り取るしかありません。アゲハはブーブー言いましたが、それでも結構まじめに手伝ってくれました。それにしてもプールって広い。擦っても擦っても、ゴールは遠い彼方。真夏の太陽を浴びて、汗はダラダラ、喉はカラカラ、水をガブガブ、おなかはタップンタップン。でも、アオタ先生が覗きに来ると」

アオタ先生がやってくる。三人がサングラスをかける。

アオタ先生　どうだ、おまえたち。辛かったら、そろそろ勘弁してやってもいいんだぞ。

アゲハ　私さあ、この夏はダイエットしようと思ってたんだ。

カブト　今日一日で、三キロは痩せるぜ。

アゲハ　ラッキー。

ヤンマ　私は海に行って、日焼けしようと思ってたんだけど。

カブト　今日一日で、ボブ・サップになれるぜ。

ヤンマ　ラッキー。

アオタ先生　そうか。じゃ、目標が達成できるまで、頑張ってくれ。俺はカニタニたちとかき氷を食ってくる。

アオタ先生が去る。

クサナギ　「しかし、さすがに一時間も擦ってると、腰は痛むし、手は疲れるし」
アゲハ　ヤンマ、もうそろそろアオタ先生の所に行かない？
ヤンマ　何しに？
アゲハ　だから、謝りによ。
ヤンマ　どうして私が謝らなくちゃいけないわけ？
アゲハ　口だけでいいのよ。もう充分に反省できました。この辺で勘弁してくださいってさ。
ヤンマ　私、反省なんかしてないもんね。
アゲハ　そう言わなかったら、途中で止めさせてくれないじゃない。
ヤンマ　悪いことをしたら、謝るか、罰を受けるか、どっちかでしょう？　罰を受けた上に、謝るなんて、絶対にイヤだ。
アゲハ　また意地を張って。
カブト　そのうち、先生の方から、「もう帰っていい」って言ってくるよ。
アゲハ　アオタ、早く来いよ。
クサナギ　「しかし、そこへ現れたのは、全く別の人物でした」

そこへ、ウラシマがやってくる。

ウラシマ　君たち、不良？
アゲハ　不良とは何だよ、不良とは。
ウラシマ　だって、その言葉遣いと、そのサングラス。
アゲハ　あ、これは、太陽が眩しすぎるから。（サングラスを外す）

ウラシマ　それじゃ、君たち、水泳部？
アゲハ　違います。今日は体育の補習で。
ウラシマ　水泳部でもないのに、プール掃除か。暑い中、大変だね。
アゲハ　ええ、まあ。
カブト　（小声で）先生か？
アゲハ　（小声で）知らない。
ウラシマ　こんなに暑いってことは、今は夏だね？
アゲハ　ええ。（カブトに）夏よね？
カブト　夏だよ。夏休みなんだから。
ウラシマ　へえ、夏休みか。冬休みじゃないのか。
アゲハ　（カブトに小声で）変な人。
カブト　（小声で）目を合わせないようにしよう。
ウラシマ　ねえ、君。君だよ、君。三人の中で、一番足の細い子。
ヤンマ　私ですか？
カブト　バカ！
ウラシマ　（ヤンマに）ちょっとど忘れしちゃったんだけど、今年って何年だっけ？
ヤンマ　二〇〇三年ですけど。
ウラシマ　こら、大人をからかうんじゃない！
ヤンマ　からかってませんよ。ねえ、カブト？
カブト　（ウラシマに）あなた、どこの誰ですか？　用のない人は、学校に入っちゃいけないんですよ。
ウラシマ　本当に、今年は二〇〇三年なのか？
アゲハ　カブト、ヤンマ、アオタ先生の所へ行こう。

ウラシマ　ちょっと待てよ。逃げることないだろう？
アゲハ　こっちに来ないで！（デッキブラシをウラシマに突き出す）
ウラシマ　わかったわかった。これ以上近付かないから、僕の質問に答えてくれよ。
アゲハ　一歩でも動いたら、大きな声を出すわよ。
ウラシマ　もう出してるじゃないか。
アゲハ　もっと大きな声を出すわよ。
ウラシマ　わかった。約束する。
ヤンマ　それじゃ、指切り。
ウラシマ　え？　女の子と指切り？　なんか、照れるなあ。（一歩踏み出す）
アゲハ　アオタ先生！
ウラシマ　汚いぞ、おまえら！
カブト　それで、おじさんの質問て何さ。
ウラシマ　おじさんはここにはいない。お兄さんなら一人いる。
カブト　お兄さんの質問て何さ。
ウラシマ　今年は何年だ。
ヤンマ　それはさっき言ったでしょう？
ウラシマ　本当に、二〇〇三年なのか？　一九八八年じゃないのか？
ヤンマ　（カブトに）間違いないよね？
カブト　間違いないよ。私が生まれたのが一九八九年で、今年十四になったから、二〇〇三年。
ウラシマ　十五日が十五年？　そんな話は聞いてないよ。（座り込む）
ヤンマ　変な人。
アゲハ　ねえねえ、校長先生の話、覚えてる？　終業式の時に言ってたでしょう？

カブト　夏になると、学校の近辺に変質者が現れるって。
アゲハ　こんな真っ昼間に現れるかな。
カブト　カブト、カメラ。
アゲハ　あんなヤツを撮るのか？
カブト　証拠写真になるでしょう？　ほら、早く。
ヤンマ　（ウラシマに）すみません、ちょっとこっちを向いてください。
アゲハ　（ウラシマに）聞こえてるんでしょう？　こっちを向いてよ。
ウラシマ　（ウラシマに）おじさんてば！
カブト　おじさんはここにはいない！
ウラシマ　（シャッターを切って）オーケイ、撮れました。もう帰っていいですよ。
カブト　そのカメラ。
ウラシマ　私のですけど。
ヤンマ　ちょっと貸してくれる？
ウラシマ　イヤです。
カブト　お返しに、君たちを撮ってあげるよ。プール掃除の記念にどうだい？
ウラシマ　こんなの、記念にしたくない。
ヤンマ　じゃ、夏休みの記念に。こう見えても、プロのカメラマンだからね。ファッション雑誌のグラビアみたいに、カッコよく撮ってあげるよ。
ウラシマ　お兄さん、プロのカメラマンなの？
カブト　ああ。まだ駆け出しなんで、主な仕事は荷物持ちだけど。
ウラシマ　要するに、アシスタントか。だから、何もわかってないんだ。いいかい、お兄さん。プロのカメラマンは記念写真なんか撮らないんだよ。
ウラシマ　どうして？

カブト　だって、バカバカしいじゃないか。アルバムに貼るための写真なんて。
アゲハ　写真て、アルバムに貼るために撮るんじゃないの？
カブト　バカ。そんなの、ただの思い出だろう？　写真は過去を懐かしむために撮るんじゃない。真実を捕まえるために撮るんだ。
ウラシマ　カッコつけちゃって。どうせ、本か何かで読んだんだろう？
カブト　違うよ。プロがそう言ってたんだよ。
ウラシマ　そんなに難しく考えることないんじゃないかな。写真なんて、撮りたいものを撮ればいいんだ。いいものが撮れたら、大切にしたいと思うだろう？　そうしたら、アルバムに貼ればいい。
カブト　プロはアルバムなんか作らないの。
ウラシマ　君がもし真実を捕まえたら、大切にしたいとは思わないのかな。
アゲハ　（カブトに）どうする？
ヤンマ　せっかくだから、撮ってもらっちゃおうか。

クサナギが机を叩く。

クサナギ　待て待て！　どうしてそんなに簡単に気を許すんだ。校長先生の話を忘れたのか？
ヤンマ　でも、そんなに悪い人に見えないし。
クサナギ　記念写真なんて、きっかけに過ぎないんだよ。何枚か撮ってるうちに、こう言い出すんだ。自然な感じで撮りたいな。上着を脱いでみようか。
ヤンマ　これ以上脱いだら、裸になっちゃいますよ。
クサナギ　それが向こうの狙いなんだよ。それから次に、こう言うぞ。君をモデルにし

て、撮ってみたいな。よかったら、僕のスタジオに来てくれないか。
ヤンマ　先生、やけに詳しいですね。
クサナギ　僕を疑って、どうするんだ。疑うなら、あの男を疑え。一枚くらいならいいよね。それが転落への第一歩なんだ。
ヤンマ　一枚くらいならいいよね。
クサナギ　あーっ！（頭を抱える）
カブト　（ウラシマに）それじゃ、お願いします。（カメラを差し出す）
クサナギ　やめろ、カブト！　やめるんだ！
ウラシマ　（カメラを受け取って）いいカメラだね。これ、本当に君のカメラ？
カブト　私のだって言ってるでしょう？
ウラシマ　それじゃ、自然な感じで撮ろうね。
クサナギ　あーっ！（頭を抱える）
三人　はい、チーズ。（思い思いのポーズで止まる）
ウラシマ　タイム。
アゲハ　（止まったままで）ねえ、早く撮ってよ。
ウラシマ　自然な感じって言わなかったっけ？
ヤンマ　（止まったままで）そんなこと言われても、ねえ。
ウラシマ　お、君、なかなかかわいいね。
アゲハ　君って、誰よ。
ウラシマ　それはもちろん、三人の中で一番伊藤つかさに似てる子。
三人　（顔を見合わせて）誰、その人？
ウラシマ　（シャッターを切る）
アゲハ　あ！　撮る時は、撮るって言ってよ！

ウラシマ　（シャッターを切る）
カブト　一枚だけって言ったじゃないか！
ウラシマ　（シャッターを切る）
ヤンマ　ちょっとちょっと、私も撮ってよ！
カブト　みんな、止まれ！

三人が止まる。

カブト　どうだ。これなら、撮れないだろう。
ヤンマ　私はまだ撮ってもらってないよ。（ウラシマに歩み寄る）
ウラシマ　（シャッターを切る）
カブト　ヤンマ！
クサナギ　ヤンマ、この時の写真は、もう現像したの？　僕にも一枚、送ってくれないかな。
ヤンマ　それが、送れないんです。
クサナギ　どうして？
ヤンマ　私たちは写ってなかったから。
クサナギ　わかった。フィルムが入ってなかったんだろう。昔のマンガによくあるパターンだ。
ヤンマ　フィルムは入ってました。
クサナギ　それなら、撮れてるはずだろう？
ヤンマ　やれやれ、これでどうやら、原稿用紙三枚に到達しましたね。
クサナギ　ちょっと待て。まだ、話の途中だぞ。

ヤンマ　国語の先生には、しっかり三枚書いてあったと伝えておいてください。
クサナギ　中途半端なことをするなよ。三枚以上なら、四枚だって、五枚だって、いいはずじゃないか。
ヤンマ　それじゃ、体に気を付けて、俳優修行に勤しんでください。
クサナギ　そんなことはいいから、続きはどうなったの？
ヤンマ　くれぐれも、怪我だけはしないように。
クサナギ　怪我はもうしちゃったんだよ！
ヤンマ　有名になったら、テレビのご対面のコーナーで会いましょう。それでは、さようなら。
クサナギ　こらこらこら！
ヤンマ　八月十四日、ヤマダミユキ。
クサナギ　ご対面のコーナーには、カブトとアゲハを呼ぼう。

クサナギが手紙を閉じる。

ウラシマ　あれ？
カブト　まさか、壊したの？
ウラシマ　フィルムがなくなった。
カブト　あーあ、これ一本しかないのに。
ウラシマ　やっぱりカメラはいいね。この、シャッターを切る音が堪らないんだな。
アゲハ　プロって言っても、いろいろあるでしょう？　何を撮るプロなの？
ウラシマ　まあ、仕事だから、何でも撮るんだけど、専門は鳥。
アゲハ　鳥って、スズメとかカラスとか？

ウラシマ　違うよ。北海道へ行ってオオワシを撮ったり、沖縄へ行ってノグチゲラを撮ったり。でも、これが全然、金にならないんだ。

カブト　だから、アシスタントをやってるんだろう？

ウラシマ　まあね。一本立ちできたら、好きな物を好きなだけ撮ろうって思ってたのに。

カブト　お兄さん、名前は？

ウラシマ　そうだな。ウラシマなんて、どうかな？

アゲハ　自分の名前でしょう？

ウラシマ　ウラシマだ。僕の名前は、ウラシマ。

ウラシマ・カブト・ヤンマ・アゲハが去る。

暗くなる。クサナギが机の上のスタンドを点ける。ハガキとペンを取り出して、手紙を書き始める。

駅長がやってくる。カンテラを左右に振る。カニタニ・サルサワ・ウスイケがやってくる。懐中電灯を左右に振る。駅長が去る。

そこへ、ナナコがやってくる。後を追って、ウラシマがやってくる。ナナコが木の陰に隠れる。ウラシマが去る。カニタニたちが木の陰を懐中電灯で照らす。ナナコが出てきて、カニタニに腕時計を渡す。ナナコが去る。

そこへ、ヤンマがやってくる。木の陰に隠れる。カニタニたちが木の陰を懐中電灯で照らす。モモヤマが出てきて、カニタニたちにカメラを向ける。フラッシュ。モモヤマが去る。

カニタニたちが懐中電灯を左右に振る。駅長がやってくる。カンテラを左右に振る。カニタニたちが去る。駅長も去る。

木の陰から、ヤンマが出てくる。そこへ、モモヤマがやってくる。ヤンマが逃げる。モモヤマがヤンマにカメラを向ける。フラッシュ。ヤンマが去る。

そこへ、ナナコがやってくる。ナナコがモモヤマに話しかける。モモヤマがナナコにカメラを向ける。フラッシュ。そこへ、ウラシマがやってくる。ナナコが去る。後を追って、ウラシマが去る。ムロマチ・アヅチがやってくる。

アヅチ　　お帰り、モモヤマ君。こんな夜中にどちらへお出かけ？

モモヤマ　ちょっとセブンイレブンまで、おでんを買いに。
アヅチ　いいねえ、この暑いのに、おでんか。ちょうどおなかが空いてたんだ。俺にも一つくれるかな。
ムロマチ　（モモヤマに）私は玉子がいいな。それから、昆布とつくねと大根と。
モモヤマ　それが生憎、みんな売り切れで。
ムロマチ　じゃ、はんぺんと竹輪とコンニャクでいいわ。
モモヤマ　それもみんな売り切れで。
ムロマチ　じゃ、何が残ってたの？
アヅチ　（モモヤマのカメラを見て）お、これはカメラだね？
ムロマチ　（モモヤマに）最近のセブンイレブンじゃ、カメラをおでんの具にしてるのか。
モモヤマ　珍しいでしょう？　だから、思わず、買っちゃいました。
ムロマチ　モモヤマ君、嘘をついちゃいけないよ。
モモヤマ　どうして嘘だってわかりました？
アヅチ　わからないわけないだろう！
ムロマチ　（モモヤマに）で、本当はどこに行ってきたの？
モモヤマ　最近、運動不足だったんで、ジョギングに。
アヅチ　ほう、どこまで？
モモヤマ　日本海まで。佐渡に横たわる天の川が見たくなって。
ムロマチ　モモヤマ君、嘘をついちゃいけないよ。
モモヤマ　先生は、僕の心が読めるんですか？
ムロマチ　君の心は平仮名よりも読みやすいからね。だから、今度は正直に答えなさい。そのカメラで何を写してきたの？

モモヤマ　正直に言うと、怒られるから。
アヅチ　まさか、写しちゃいけないものを写してきたんじゃないだろうな？
モモヤマ　何だよ、写しちゃいけないものって。
アヅチ　そりゃ、おまえ、写される方が「写さないで」って思うものだよ。
モモヤマ　本人の承諾は取らなかった。
アヅチ　バカヤロー！　おまえは、いつも先生が言ってる言葉を忘れたのか？
ムロマチ　カメラは時として、人を傷つけることがある。それは、カメラで頭を殴ると痛いって意味じゃない。他人のプライバシーに、土足で踏み込むってことだ。
アヅチ　（モモヤマに）カメラマンていうのはな、常に写される側の立場に立って行動しなくちゃいけないんだ。たとえば、おまえがお風呂に入ってるところを、他人に写されたらどうする。
モモヤマ　そいつがお風呂に入ってるところを写し返す。
アヅチ　それじゃ、何の解決にもならないだろう！　いいか、モモヤマ。本人に無断で裸を撮るっていうのは、暴力に等しい行為なんだぞ。
モモヤマ　おまえは、僕が裸を撮ってきたって言うのか？
アヅチ　こんな夜中に、他に撮るものがあるか。
モモヤマ　僕は、裸になんか、興味はない。
アヅチ　嘘をつくな、嘘を。
ムロマチ　アヅチ君、今のは嘘じゃない。
モモヤマ　先生は信じてくれるんですね？
ムロマチ　君にこんなに上手に嘘がつけるわけないからね。
アヅチ　（モモヤマに）じゃ、何を撮ってきたって言うんだ。
モモヤマ　幽霊を。

アヅチ　幽霊？

クサナギが風鈴を鳴らす。

アヅチ　キャーッ！
ムロマチ　モモヤマ君、君は幽霊なんか信じてるの？
アヅチ　（モモヤマに）おおおまえ、そそそれでも、プププロのカメラマンか？
モモヤマ　先生はいつも言ってますよね？　素人のカメラマンは事実を写し、プロのカメラマンは真実を写すって。
アヅチ　ゆゆ幽霊の、どどどこが、しし真実なんだ。
モモヤマ　真実っていうのは、目に見えないものなんだ。しかし、その見えないものが、ファインダーを通すと、一瞬見えることがある。（ムロマチに）その一瞬を捕まえられるかどうかが、写真の価値を決めるんでしょう？
アヅチ　ししししかし。
ムロマチ　アヅチ君、ピントがずれてる。
アヅチ　ははははい。（自分の頭を叩いて、モモヤマに）しかし、幽霊なんか撮ったって、一銭にもならないだろう。
ムロマチ　いや、アマチュアの中には、心霊写真で稼いでるヤツもいるらしいぞ。まあ、大抵は下手くそなトリック写真だけど。
モモヤマ　トリックじゃない写真だってあります。ただ、素人が撮った写真じゃ、テクニックの問題で、信用価値が低いんです。
アヅチ　そこで、プロのおまえが撮ろうってわけか。
モモヤマ　プロのカメラマンは、心霊写真なんてバカにするだろう？　それじゃ、いつ

になっても、幽霊は子供のおもちゃのままだ。
とか何とか言っちゃって、本当はテレビに出て、「この丸の中に写ってます」ってやりたいんだろう。

アヅチ　僕は僕のカメラで、幽霊の存在を証明したいんだ。

モモヤマ　とすると、そのフィルムの中には、幽霊の姿がバッチリ写ってるんだな？

ムロマチ　さあ。

モモヤマ　何だよ、撮れなかったのか？

ムロマチ　わかりません。白い人影を追いかけて、シャッターをバシバシ切ったんだけど、うまくカメラに入ったかどうか。

モモヤマ　白い人影？　そそそれじゃおまえ、ほほ本物の、ゆゆ幽霊を見たのか？

アヅチ　（モモヤマに）現像してこい。今すぐ、現像してこい。

ムロマチ　はい！

モモヤマ　はい！

モモヤマが走り去る。

アヅチ　うう写ってますかね、ゆゆ幽霊？

ムロマチ　バカ。幽霊っていうのは物質じゃない。精神的な存在なんだ。カメラは物質に反射した光を捉える。精神が光を反射するか？

アヅチ　ということは、もし幽霊が存在するとしても、写真には写せないんだ。

ムロマチ　写真に写った幽霊は、写ったという時点で偽物なんだ。

モモヤマが走ってくる。手には、数葉の写真。

モモヤマ　現像できました！
ムロマチ　よし、見せてみろ。（モモヤマの手から写真を取る）
モモヤマ　どうです？　ちゃんと写ってたでしょう？
ムロマチ　確かに人影が写ってるね。白いブラウスに、黒っぽいスカート。これはまだ子供だな。
モモヤマ　中学生の幽霊です。
アヅチ　どうしてそんなことがわかるんだよ。
モモヤマ　だって、これを撮ったのは、すぐそこの中学だから。
ムロマチ　カズコが通ってる中学か？
モモヤマ　カズコ君から聞いてませんか？　あの中学には、毎年夏になると、幽霊が出るんです。僕はセブンイレブンのおばさんに聞いて、七月の末から毎晩張り込んでたんですが、ついにプールの近くで。
アヅチ　うわあっ！
ムロマチ　どうした？
アヅチ　ここれなんか、ささ三人も写ってます！
モモヤマ　あ、それは別だ。その三人は、僕と同じで、幽霊を待ち伏せしてたんだ。
アヅチ　おまえみたいな物好きが、他にもいたのか。
モモヤマ　僕が幽霊を追いかけてたら、今度はこの三人が僕を追いかけてきたんだ。僕を幽霊だと思ったんだろうな。だから、お返しにパチリ。
ムロマチ　ということは、この子は幽霊で、この三人は生きてる人間か。
モモヤマ　そういうことになります。
ムロマチ　どこがどう違うんだ？
モモヤマ　そんなの簡単じゃないですか。三人は僕を追いかけてきたのに、この子だけ

アヅチ　は僕から逃げた。何か、疚しいことがあったんです。
ムロマチ　夜中にカメラを持った不審な男に出会ったんだ。逃げたくもなるだろう。
それだけじゃ、この子が幽霊だって証拠にはならないな。大体この子、どこかで見たような気がする。
モモヤマ　先生の中学時代の同級生じゃないですか？　失恋を苦にして、校舎の屋上から投身自殺した子ですよ。
ムロマチ　そんな同級生はいない。
アヅチ　おい、この最後の一枚はなんだ。これだけ、明るい場所で撮ってるな。
モモヤマ　ああ、それも別だ。帰りに、校門の前で、女の子に会って。
アヅチ　その子も中学生か？
モモヤマ　いや、歳は僕と同じぐらいかな。「白い服の男は来なかった？」とか、「中学生は見なかった？」とか、しつこくつきまとってきて。
アヅチ　それで撮ったのか。
モモヤマ　あんまりしつこいから、フラッシュで脅かしてやったんだ。どうだ？　凄い顔で写ってるだろう？
ムロマチ　おめでとう、モモヤマ君。
モモヤマ　は？
ムロマチ　とうとう君は真実を写したんだ。この最後の一枚で。
モモヤマ　最後の一枚って、まさか。
ムロマチ　街灯に照らされた校門ばかりで、女の子の姿はどこにもない。

ムロマチ・アヅチ・モモヤマが去る。

郵便屋が自転車に乗って、やってくる。

郵便屋　クサナギさん、郵便です。

クサナギ　ちょうどいい時に来てくれました。今、ヤンマに返事を書いてるところなんだ。もうすぐ書き終わるから、ついでに持ってってくれない？

郵便屋　あんまり時間がないんですけど。

クサナギ　大丈夫大丈夫、そんなに待たせやしないから。見てごらん。住所も書いた、名前も書いた、その上なんと、郵便番号まで書いてある。後は中身を書くだけなんだから。

郵便屋　すみませんけど、先を急いでるんで。

クサナギ　薄情者！

郵便屋　は？

クサナギ　足の悪い人間に、ポストまで歩いていけって言うのか？

郵便屋　それじゃ、また明日来た時に持っていきますから。

郵便屋が歩き出す。後を追って、クサナギが松葉杖で走る。

クサナギ　明日じゃなくて、今日出したいんだよ。

郵便屋が逃げる。後を追って、クサナギが松葉杖で走る。

クサナギ　聞いてるのか？　僕は今日出したいって言ったんだ。
郵便屋　ずいぶん元気じゃないですか。
クサナギ　もうダメ。もう一歩も動けない。
郵便屋　それじゃ、また明日。
クサナギ　手紙の続きが読みたいんだよ。すぐ書いて送れって、ヤンマに伝えたいんだ。
郵便屋　続きって、これのことかな。（封筒を取り出す）
クサナギ　僕宛の手紙じゃないか。貴様、配達しないで、そのまま持ち帰ろうとしたな？
郵便屋　忘れてたんですよ。あなたが変なことを言うから。
クサナギ　そうか、やっぱり郵便局の仕業だったのか。一週間も遅れるなんて、どうも
郵便屋　おかしいと思ったら、貴様が隠してたんだな？
クサナギ　誤解ですよ。この手紙は、今朝着いたばかりのやつで。
郵便屋　よこせ。その手紙をよこせ。
クサナギ　そんな言い方をしなくても、あげますよ。はい。（封筒を差し出す）
郵便屋　（受け取って）オオシマアゲハ？　今度はアゲハからだ。
クサナギ　また生徒さんからですか？
郵便屋　違う。僕が待ってたのは、こんなやつの手紙じゃない。
クサナギ　一体誰の手紙を待ってるんですか？
郵便屋　仕事の関係だよ。
クサナギ　そう言えば、あなた、何の仕事をしてるんですか？　毎日、こんな時間に家
郵便屋　でブラブラしてて、生活の方は大丈夫なんですか？
クサナギ　僕だって、仕事はしたいよ。でも、この足じゃ、怪我人の役しかできないだ

郵便屋　ろう？
クサナギ　え？　あなた、俳優さんなんですか？
郵便屋　アクターって言ってくれないか？
クサナギ　どうせ、刑事ドラマの犯人役とかが専門なんでしょう？
郵便屋　犯人だけじゃないよ。被害者だって、やったことあるよ。つまり、あなたは、怪我が治ってからやる仕事を探していて、その採用通知を待ってるわけだ。
クサナギ　どうしてわかった？
郵便屋　言ったでしょう？　僕は手紙のプロだって。
クサナギ　とにかく、こんな喧しいやつの手紙なんか、ほしくないんだ。担任だった半年間、こいつの声にどれだけ苦しめられてきたことか。昨日のヤンマが八十ホーンなら、このアゲハは百ホーン。二日酔いで授業してると、頭にガンガン響くんだ。
郵便屋　二日酔いで授業をしたんですか？
クサナギ　そりゃ、先生だって人間だもの、お酒くらい飲むよ。うるさいやつにはとびっきり難しい質問をするし、かわいい子には十点でも二十点でもサービスしちゃう。
郵便屋　失礼します。
クサナギ　もう帰っちゃうの？　麦茶、昨日からずっと冷やしてるんだよ。
郵便屋　仕事をサボるわけにはいかないって言ったでしょう？
クサナギ　今日はね、ビールも冷やしてるんだよ。
郵便屋　ひいきをする先生のお酒は、飲みたくありません。

郵便屋が自転車に乗って、去る。

クサナギ　何だか嫌われちゃったみたいだな。友達になりたかったのに。仕事もしないで毎日ブラブラしてると、まじめに働いてる人が眩しく見えます。僕も先生をやってる時は、毎朝七時に起きて、八時半には教壇に立ってました。あの時の僕は、彼みたいに眩しかったのかな。そんな時に届いた手紙。

クサナギが手紙を開く。

クサナギ　「暑中お見舞い申し上げます。ハーイ、クサナギ先生、元気？」。元気じゃない。「私は前から夏やせっていうのに憧れてて、夏やせするには暴飲暴食が一番だっていうから、スイカとかかき氷とか、二人前三人前って食べたのに、ちっとも効果がありません」。そんなに食べたら、かえって太るだろう。「だから、最近は体重計が怖くて、お風呂に入るたびに目に入ってイヤだから、廃品回収に出してしまいました。何も知らないママは、『どこにしまったかしら』って、家中探し回ってます。ママ、ごめんね」。こういう無責任なところは全然変わってない。「ヤンマの手紙、もう読みましたか？　昨日出したって言ってたから、この手紙より一日早く着いたでしょう？『なんでクサナギ先生なんかに出したの？　好きだったの？』って聞いたら、『教師より、元教師の方がマシだから』って言ってました」。マシとはなんだ、マシとは。「私もそれには同感なので、こうして手紙を書いているのです。だから、変な誤解はしないでね」。そんなもの、してたまるか！

別の場所に、アゲハが現れる。

アゲハ　クサナギ先生って言われて、まず最初に思い出すのは学芸会です。まさか、先生が主役をやるとは思いませんでした。

クサナギ　一度やってみたかったんだよ、ロミオの役は。

アゲハ　次に思い出すのは、作文の授業。「テーマは自由だ。何でも好きなことを書いていいぞ」って言って、後は自分の机で居眠り。

クサナギ　あの日は体調が悪くてね。どうしても立ってられなかったんだ。

アゲハ　確かに、顔が土気色でしたね。近くに寄ると、お酒の匂いがプーン。

クサナギ　バレてたのね。

アゲハ　そのくせ、作文を返す時は、文句ばっかり。「好きなことを書いていい」って言ったくせに、「おまえの考え方は間違ってる」って。

クサナギ　仕方ないだろう。君たちが非常識なことばっかり書くから。

アゲハ　非常識は先生の方でしょう？　雑談しない先生は肩が凝って困るけど、雑談しかしない先生はもっと困るんだから。テレビとか映画の話ばっかりして、「僕は先生より俳優になりたいんだ」って、顔に書いてありました。

クサナギ　それもバレてたのね。

アゲハ　なんて書いてると、また「間違ってる」って言われるから、話題を変えます。それではヤンマの真似をして、今日の出来事、行ってみようか！

カブト・ヤンマが飛び出す。後を追って、アオタ先生・カニタニ・サルサワ・ウスイケが飛び出す。

アオタ先生　ヤマダ、おまえの気持ちはよくわかった。やっぱり、おまえは先生が嫌いなんだ。

ヤンマ　また私を疑うんですか？

アオタ先生　他に誰がやるって言うんだ。

カニタニ　ヤマダさん、あなたには前科があるのよ。まず最初に疑われて当然でしょう？

アゲハ　前科って何よ。そんな言い方、失礼じゃない？

カブト　（カニタニに）ヤンマはちゃんとプール掃除をして、罪を償ったんだぞ。

カニタニ　でも、全然反省してなかったじゃない。あなた、一度でも先生に謝った？

サルサワ　（カブトに）アオタ先生ったら、またいきなり飛び込んじゃって、昨日よりもっとひどい怪我をしたのよ。

アゲハ　そう言えば、包帯の数が大分増えてる。

ウスイケ　どうせまたやるんじゃないかと思ったのよね。だから、昨夜はプールに張り込んで。

アオタ先生　おまえたち、夜中に学校に来たのか？

ウスイケ　八時頃から、三人で更衣室に隠れてたんです。ヤマダさんが来るんじゃないかと思って。

アオタ先生　それで、何か見たのか？

カニタニ　（腕時計を示して）十二時頃、校舎の裏から黒い影がスーッて現れたから、「そら、捕まえろ！」って追いかけたんです。校庭の隅に追い詰めて、懐中電灯で照らそうとした瞬間にピカリ！

アオタ先生　ピカリ？

サルサワ　カメラを持ってたんですよ。

ウスイケ　（アオタ先生に）目の前が真っ白になっちゃって、その隙に逃げられました。

カニタニ　ムロマチさん、あなたがカメラを貸したんでしょう？　やっぱり、あなたたち、共犯なんじゃない。
ヤンマ　それは私じゃないよ。
カニタニ　まだ言い逃れするつもり？
ヤンマ　確かに、私はプールの水を抜いたけど――――
アオタ先生　何？
ヤンマ　（カニタニに）カメラは持って行かなかった。その人、私を追いかけてきたのよ。
カニタニ　何言ってるの。あんたを追いかけてたのは、私たちよ。
アゲハ　わかった。カニタニさんたちが追いかけてたのはカメラを持った誰かで、その誰かが追いかけてたのがヤンマなのよ。
サルサワ　その誰かって、誰よ。
アゲハ　さあ。
アオタ先生　先生には大体見当がついている。
ウスイケ　誰なんですか？
アオタ先生　幽霊。
六人　幽霊？

クサナギがシンバルを鳴らす。

カニタニ　キャーッ！
アオタ先生　おまえたち、聞いてないのか？　この学校はな、毎年今頃になると、幽霊が出るんだ。それも、一人や二人じゃない。

カブト　でも、幽霊がカメラなんか持ってるかな。
アオタ先生　ピカリと光ったのは、カメラのフラッシュじゃないかもしれない。
カニタニ　他に光るものって言ったら、ホタル？
サルサワ　花火？
ウスイケ　ひとだま？

クサナギが木魚を鳴らす。

カニタニ　キャーッ！
アゲハ　凄い！　私、一度でいいから、ひとだまって見てみたかったんだ。
カニタニ　おまえ、怖くないのか？
アゲハ　どうして怖いの？　別に、襲いかかってきて、全身大火傷ってことにはならないでしょう？
アオタ先生　まあ、おまえたちも命に別状がなくてよかった。ところで、ヤマダ、幽霊の話が始まる前に、何か言わなかったっけ？
ヤンマ　言いましたっけ？
アオタ先生　確か、プールの水を抜いたのは自分だって。
カニタニ　ヤマダさん、再犯の罪は重いのよ。
カブト　（アオタ先生に）でも、プールは昨日、掃除したばっかりですよ。
カニタニ　トイレの掃除はしなかったでしょう？
アゲハ　よかった。トイレだけなら、十五分で終わるよ。
カニタニ　十五分じゃ無理よ。うちの学校のトイレは十カ所もあるのよ。
アゲハ　それ、全部やれって言うの？

カニタニ　自業自得よ。女子トイレだけじゃなくて、男子トイレもやるのよ。職員トイレもやるのよ。（腕時計を示して）全部終わるのは、夜中の十二時ね。

アオタ先生　カニタニ、おまえが判決を下すな。今日はトイレ掃除じゃなくて、図書室の整理をしてもらう。ミドリ先生のお手伝いだ。

カニタニ　そんなの、昨日より楽じゃないですか。

アオタ先生　図書室っていうのは、昼でも暗いし、空気もひんやりしてるだろう。幽霊の好きそうな場所ですね。

ウスイケ　日が暮れるまでに終わらせないと、ご対面てことになるわね。

サルサワ　いいわよ。私はご対面したいんだから。

アゲハ　オオシマ、ミドリ先生に会ったら、こう言うんだ。「アオタ先生の命令で来ました。奴隷だと思って、好きに使ってください」って。

アオタ先生　生徒を奴隷呼ばわりするなんて、それでも教師？

アゲハ　（アオタ先生に）私たちはまたバスケットですね？

カニタニ　いや、今日はグランドに行って、野球をやろう。おまえたちに、本物の千本ノックを体験させてやる。よし、行くぞ。

アオタ先生・カニタニ・サルサワ・ウスイケが去る。

クサナギ　「たとえアオタ先生の点数稼ぎだって、プール掃除よりはマシです。もともと図書室は大好きだし、幽霊にも会いたいと思っていたので、今日もヤンマに付き合うことにしました」

そこへ、ミドリ先生がやってくる。エプロンをしている。

ミドリ先生　ちょっと、あなたたち、運ぶのを手伝ってちょうだい。

ミドリ先生が去る。後を追って、カブト・ヤンマ・アゲハが去る。

クサナギ　「ミドリ先生は大張り切りで、『三人も手伝ってくれるなら、書庫の奥の方に溜まってる本を、まとめて整理しちゃいましょう』って、私たちを扱き使います。この先生はとっても仕事熱心なんだけど、ひたすらマイペースなので、合わせるのが大変です」。そうは言うけどね、こっちだって、生徒に合わせるのは大変なんだよ。特に、君たちみたいな生徒は。

ミドリ先生・カブト・ヤンマ・アゲハが戻ってくる。手にはたくさんの本。後から、ナナコもついてくる。

カブト　先生、これ、全部、捨てちゃっていいんですか？
ミドリ先生　まさか。そんなもったいないことをしたら、もったいないおばけが出るわよ。
カブト　おばけの話はもうやめましょう。
アゲハ　何よ、カブト、怖いの？
カブト　怖いんじゃなくて、私は幽霊の存在なんて認めないの。
アゲハ　あんたが認めなくたって、存在するんだから、仕方ないでしょう？
カブト　存在するもんか。幽霊なんて、出るかもしれない、出たらどうしようって思うから出るんだ。錯覚なんだよ。
ヤンマ　それじゃ、あの写真はどうなるわけ？
アゲハ　写真て？
カブト　（ヤンマに）バカ！　アゲハの前で言うなって言ったのに。
アゲハ　何よ、私に隠し事？　二人だけの秘密で、私は仲間外れ？
カブト　別に秘密じゃないけどさ、アゲハに言うと、話が変に盛り上がっちゃうから。
アゲハ　私、帰る。二学期に教室で会っても、話しかけないでよね。
カブト　わかったわかった。ちゃんと話すから、怒るなよ。ただし、絶対に誰にも言わないこと。
アゲハ　約束する。
ミドリ先生　（カブトに）先生も約束する。
ナナコ　（カブトに）私も。
カブト　昨日、プールで掃除をしてる時、写真を撮ったよな？　あれから、家に帰って、現像したんだけど、何だかおかしいんだ。
アゲハ　おかしいって？
カブト　何にも写ってないんだよ。私もヤンマもアゲハも、それにあのウラシマって

人も。

ミドリ先生　カメラのキャップがつけっぱなしだったんでしょう？

カブト　そんな素人みたいな失敗はしません。見てください。（写真を差し出して）

ミドリ先生　これは、私がウラシマさんを撮ったやつなんですけど。

ヤンマ　プールと空と、あの木だけ。

ミドリ先生　ウラシマさんだけ写ってないんです。

ヤンマ　ウラシマさんて、誰？

アゲハ　昨日、プール掃除をしてたら、いきなり現れて。本人は、プロのカメラマンだって言ってたけど。

カブト　こっちの写真は？

アゲハ　ウラシマさんが撮ったやつ。こっちはもっとおかしいんだ。私たちが写ってない。プロだなんて威張っておいて、全部失敗してるじゃない。

ヤンマ　それより、もっと重大なことに気がつかない？

アゲハ　プールが写ってない！

カブト　校庭と校舎と、あの木だけ。プールで撮ったのに、プールが写ってないんだ。

ミドリ先生　でも、これ、確かに、うちの学校よ。

ヤンマ　先生、うちの学校のプールは、何年前にできたんですか？

ミドリ先生　わりと新しいのよ。まだ十年ぐらいしか経ってないんじゃないかな。

アゲハ　ということは、この写真に写ってるのは、十年以上前の景色？

クサナギが机を叩く。

クサナギ　こら、アゲハ！　調子に乗って、デタラメを書くんじゃない！
アゲハ　私はただ、先生の言った通りに――
クサナギ　確かに、僕は、思ったことを思った通りに書けって言ったよ。だからって、ありもしないことを思うんじゃない。
アゲハ　そう言うだろうと思って、問題の写真を同封しました。見てください。
クサナギ　（封筒から写真を出して）本当だ。
アゲハ　（ミドリ先生に）ということは、十年以上前の景色を写せるウラシマさんは。
ヤンマ　十年以上前の人間なのよ。
アゲハ　だから、カブトの写真には写ってないんだ。
クサナギ　つまり、ウラシマさんは、現実には存在しない人間なんだな。
アゲハ　（ミドリ先生に）ということは。
クサナギ　幽霊？
ミドリ先生　キャーッ！
カブト　（アゲハに）それは私も考えた。でもさ、ウラシマさんには足もあったし、幽霊にしちゃやけにのんきだったし、第一、昼間からのこのこ現れるかね？
ナナコ　幽霊は夜しか現れないなんて、ただの迷信よ。
アゲハ　でも、幽霊は星と同じで、太陽の光の下では見えないんじゃないの？
ナナコ　それが迷信だって言うの。太陽だって星の一種じゃない。問題は、その星が近くにあるか遠くにあるかってことなの。幽霊だって、近くにいたら、昼間でも見えるのよ。
ミドリ先生　校長先生にも見えたそうよ。
ヤンマ　昼間に出たんですか？
ミドリ先生　昨日、校長室で仕事をしてて、お昼にお寿司を取ったんだって。で、食べる

前にトイレで手を洗って、戻ってきたら、ウニがなくなってたの。「アオタのやつ、またやりやがったな」と思って、隣の職員室へ行ったんだけど、誰もいなかった。諦めて、校長室に戻ると、今度はトロもイクラも甘エビもない。残ってたのは、ガリだけ。もう完全に頭に来ちゃって、「アオタ！」って怒鳴りながら、廊下に飛び出した。すると、十人ぐらい白い人影が、廊下の向こうへ走っていきながら、「ごちそうさま」って。

アゲハ　やっぱり、この学校は幽霊の名所なんだ。

カブト　とんでもない学校に入学してしまった。

ヤンマ　でもさ、いくら名所だって、ちょっと数が多すぎない？

ナナコ　しょうがないのよ、駅だから。

ヤンマ　駅？

ナナコ　死んだ人はここに集まって、みんなで一緒に天国へ行くの。

カブト　どうしてこの学校から？

ヤンマ　人がたくさん集まれる場所って言ったら、学校とか公園ぐらいしかないでしょう？

カブト　駅って呼ぶのはどうして？

（ナナコに）まさか、ここから銀河鉄道に乗って、天国へ行くっていうんじゃないよね？

ナナコ　それじゃ、まるで童話よね？　でも、それが事実なの。

アゲハ　嘘だ。丹波哲郎の話と違う。

ナナコ　あの人はまだ死んでないから、知らないのよ。

アゲハ　じゃ、どうしてあんたは知ってるのよ。

ナナコ　私は、この本を読んだから。（と本を差し出す）

アゲハ　（受け取って）これに、銀河鉄道のことが書いてあるの？
ミドリ先生　（受け取って）聞いたことのない題名ね。こんなの、うちの図書室にあったかしら。

そこへ、アオタ先生がやってくる。

アオタ先生　ヤマダ、ミドリ先生にまで、ご迷惑をかけてないだろうな？
ヤンマ　まじめに仕事してますよ。
アオタ先生　本当ですか、ミドリ先生？
ミドリ先生　ええ。
ヤンマ　ミドリ先生の言うことは信じて、私の言うことは信じないんだから。
アオタ先生　おまえがそんなことを言える立場か？　プールの水を二度も抜いておいて。今日は覚悟して、家に帰るんだな。
ヤンマ　まさか、家に電話したの？
アオタ先生　俺が言っても反省しないんだ。お母さんに言ってもらうしかないだろう。
アゲハ　ひどい。お母さんは関係ないでしょう？
アオタ先生　生徒の転落を食い止めるには、学校と家庭ががっちりスクラムを組むことが大切なんだ。そうですよね、ミドリ先生？
ミドリ先生　ええ。
アゲハ　（アオタ先生に）転落なんかしてないじゃない。
アオタ先生　自覚のないところがますます心配だ。おまえの家にも電話しておいてよかった。
アゲハ　私の家にもしたの？

カブト　（アオタ先生に）それじゃ、私の家にも？　あーあ、帰ったら、またゲンコツだ。
アオタ先生　すばらしい。今時、子供を殴る親なんて、なかなかいないぞ。それだけ、おまえはお母さんに愛されてるんだ。そうですよね、ミドリ先生？
ミドリ先生　ええ。
アオタ先生　お仕事の方はまだしばらくかかりそうですか？　僕はそろそろ帰ろうかと思ってるんですが。
ミドリ先生　まだしばらくかかりそうです。
アオタ先生　もっと生徒をよこしましょうか？　パッパと片づけて、ビールでも飲みに行きましょう。
ミドリ先生　いいえ、四人も手伝ってくれて、大助かりです。これ以上、人手が増えても。
アオタ先生　四人？　僕がよこしたのは、三人だけですが。
ミドリ先生　でも、ヤマダさんと、オオシマさんと、ムロマチさんと。

五人がナナコを見る。

クサナギ　誰だ、その女は！
ミドリ先生　（ナナコに）そう言えば、あなたはどちらの方でしたっけ？
ヤンマ　先生の知り合いじゃないの？
ミドリ先生　（ナナコに）お会いするのは初めてですよね？
ナナコ　ええ。
クサナギ　おまえは一体何者だ！
アゲハ　うるさいなあ。少し黙っててよ。

クサナギ　だって、アゲハ、もしかしたら、そいつは、君が前から会いたがってた――――
ナナコ　（ミドリ先生に）この学校の卒業生です。図書室が懐かしくて、フラッと覗いてみたら、皆さんが忙しそうにしてたんで、何か手伝うことはないかなと思って。
ミドリ先生　なんだ、卒業生ですか。それならそうと言ってくださいよ。知らない間に仲間に入ってたから、座敷童子かと思っちゃった。
アゲハ　アゲハ！
カブト　私はまた、校長先生に手を振ったうちの一人じゃないかって。
ミドリ先生　先生！
カブト　怖がることないでしょう、ムロマチさん。こんなに明るい幽霊がいるわけないじゃない。
ミドリ先生　ムロマチ？（カブトに）あなた、ムロマチって名前なの？
ナナコ　そうですよ。それがどうかしましたか？
ナナコ　ううん、別に。

そこへ、ウラシマがやってくる。

ウラシマ　ナナコ君、こんな所で何をしてるのかな？
ナナコ　ミドリ先生のお手伝い。ほら、私って、困ってる人を見ると、放っておけないタチだから。
ウラシマ　ふーん。で、僕とした約束は？
ナナコ　約束って？
ウラシマ　とぼけるなよ。昨日、おまえはなんて言った？「明日、必ず一緒に行く」っ

て言っただろう？　ほら、来いよ。

ミドリ先生　あの、あなたも卒業生ですか？

カブト　違いますよ。この人が、さっき話したウラシマさん。

ミドリ先生　キャーッ！　でも、そんなふうには見えないわね。

アオタ先生　（ウラシマに）君君、用もないのに、学校の中をブラブラされちゃ困るんだよ。

ウラシマ　いや、僕は彼女を探しに来ただけで。あれ？

ナナコ　（黙って、逃げようとしている）

ウラシマ　ナナコ君、どこへ行くのかな？

ナナコ　家に帰る。一応、お父さんとお母さんに挨拶してこないと。

ウラシマ　おかしいな。家には昨日帰ったって言ってなかったっけ？

ナナコ　昨日は窓から覗くだけで、中に入らなかったの。だって、お父さんの頭を見て、ビックリしたんだもん。すっかりハゲちゃってて。

ウラシマ　仕方ないだろう。あれから、十五年も経ったんだから。

ナナコ　だから、今日は勇気を出して、声をかけてみる。「お父さん、その髪形、素敵よ」って。

ウラシマ　その前に、約束を守れよ。ナナコ！

ナナコが走り去る。後を追って、ウラシマが走り去る。

カブト　今、十五年って言ったよな？

ヤンマ　ということは、ウラシマさんは十五年前に死んだの？

アゲハ　ウラシマさんだけじゃない。今の、ナナコって人もよ。

アオタ先生　ミドリ先生、こいつら、一体何の話をしてるんです。
ミドリ先生　オオシマさん、もしかして、今のナナコって人も。
アゲハ　そうです。幽霊だったんです。

カブト・ヤンマ・アゲハ・ミドリ先生・アオタ先生が去る。

クサナギ　こら、アゲハ。君は幽霊に会いたかったから、そう思うんだよ。大した証拠もないのに、幽霊だって決めつけたら、失礼じゃないか。ウラシマさんは超能力者だったんだ。だから、あの写真は、念写で写したんだな。それから、ナナコは子供の頃に、ＵＦＯに連れ去られたんだ。それで、十五年ぶりに帰ってきたんだ。ほら、見ろ。全く別の説明だってできるだろう？　二人が幽霊だって説明するより、よっぽど説得力がないじゃないか。あーっ！　やっぱり、幽霊は存在するんだ。そう言えば、昨夜、玄関の方で変な音がしたなまさか。お母さん！

クサナギが走り去る。

ナナコがやってくる。木の陰に隠れる。ウラシマがやってくる。周囲を見回し、去る。
ナナコが木の陰から出る。笑う。と、ウラシマが戻ってくる。ナナコが走り去る。後を追って、ウラシマも走り去る。ムロマチ・アヅチ・モモヤマがやってくる。

ムロマチ　太陽は沈んだか。
モモヤマ　たった今、西のビルの谷間に。
ムロマチ　天には星一つなく、地には風一つない。まさに、絶好の幽霊日和だな。
モモヤマ　でも、まだ昼の光が残ってますよ。こんな時間に出ますかね。
ムロマチ　「黄昏は逢魔の時間」と言うだろう。昼でも夜でもない薄暗闇は、人の心を惑わせる。人を惑わせたい幽霊なら、黙って隠れていられるわけがない。
アヅチ　せせ先生、ややっぱり、かか帰りましょう。
ムロマチ　アヅチ君、スタジオを出る時の勢いはどうしたの？
モモヤマ　（アヅチに）俺は俺のカメラで、幽霊が存在しないことを証明してやるって、意気込んでたじゃないか。
アヅチ　幽霊の正体見たり枯尾花。おまえが会った女の子だって、幽霊なんかじゃない。シャッターを切る直前に、ササッて動いたに違いないんだ。
モモヤマ　そんなに敏捷そうには見えなかったけど。
アヅチ　でも、冷静になって、考えてみろ。その子がただの人間だって証明できても、それだけじゃ、幽霊一般の存在を否定することはできない。

モモヤマ　それは、僕も同じだ。あの子が本物の幽霊なら、何回シャッターを切っても、写真には写らない。僕のカメラじゃ、あの子の存在は証明できないんだ。

アヅチ　プロのカメラマンが、心霊写真をバカにする理由がわかったぞ。カメラじゃ、幽霊に歯が立たないからだ。

ムロマチ　しかし、カメラには真実を写す力がある。

アヅチ　そう言いながら、先生はカメラを持ってきてないじゃないですか。

ムロマチ　カメラマンはいつも二つのカメラを持っている。一つ目のカメラで歯が立たないなら、二つ目のカメラで立ち向かうしかない。

モモヤマ　二つ目のカメラって？

ムロマチ　シャッターは瞼、フィルムは網膜、心に焼き付けた真実は、写真以上の真実だ。

モモヤマ　でも、それをどうやって人に見せるんですか？

ムロマチ・アヅチ・モモヤマが走り去る。カニタニ・サルサワ・ウスイケがやってくる。

カニタニ　太陽は沈んだか。

サルサワ　たった今、西のビルの谷間に。

カニタニ　よし、帰ろう。

ウスイケ　ちょっとちょっと、ヤマダさんを待つんじゃなかったの？

カニタニ　（腕時計を示して）こんな早い時間に来るわけないだろう？　昨夜だって、十二時過ぎてから来たじゃないか。

ウスイケ　それなら、十二時まで待とうよ。

カニタニ　これ以上待ったら、真っ暗になっちゃうじゃないか。

ウスイケ　懐中電灯があるじゃない。
カニタニ　バカだな、おまえは。ホラー映画とか、見たことないのか？　幽霊っていうのは、懐中電灯を向けた方には絶対にいないの。必ず反対側にいて、ふうって安心して振り返るのを待ってるんだよ。
サルサワ　（ウスイケに）それに、もし運良く幽霊を照らしたとするよ。照らされた幽霊がこっちを見る。それから、どうするの？　懐中電灯で戦うわけにはいかないでしょう？
ウスイケ　それじゃ、ヤマダさんが水を抜くのを、黙って見過ごすの？
カニタニ　今夜は来ないよ。あいつだって、幽霊は怖いはずだ。
ウスイケ　ヤマダさんのかわりに、オオシマさんが来るかもしれない。
カニタニ　あのバカ、大喜びで来そうだな。
サルサワ　そうやって、毎日水を抜かれたら、補習も毎日延期になって、夏休みが終わっちゃうよ。
カニタニ　そんな夏休み、イヤだ！
サルサワ　おもしろくも何ともないじゃない。中学二年の夏休みは、一番危険じゃなかったの？
ウスイケ　幽霊が出たら、危険だね。
カニタニ　ウスイケさん、後はよろしく。
ウスイケ　私、毎日補習でもいい！

カニタニ・サルサワ・ウスイケが走り去る。ナナコがやってくる。と、ウラシマが木の陰から出てきて、ナナコの前に立ち塞がる。

ウラシマ　ナナコ君、今まで、どこに行ってたのかな？
ナナコ　言ったでしょう？　自分の家。
ウラシマ　ふーん。で、お父さんに挨拶はできたのか？
ナナコ　そうしようとは思ったんだけど、やっぱり、声をかけられなかった。
ウラシマ　どうして？
ナナコ　だって、いきなり娘の幽霊が出てきたら、心臓麻痺を起こすかもしれないし。
ウラシマ　しかも、死んでから、十五年も経ってるしな。
ナナコ　みんな、変わっちゃってるのよね。私のことなんか、覚えてないみたい。
ウラシマ　浦島太郎の気分だろう？　でも、僕らは覚えてる。
ナナコ　私たちにとっては、たったの十五日前なのに。でも、どうして？

そこへ、駅長がやってくる。

駅長　列車に乗る前に、説明を受けたでしょう？
ナナコ　あの、あなたは？
駅長　この駅の駅長です。天上と地上では、時間の流れが全く違う。この話は、出発する前に、天上駅の駅長が説明したはずですが。
ウラシマ　それがその、僕らは窓から乗り込んだんで。
駅長　まさか、切符を持たないで？
ウラシマ　どうしても帰りたかったんです。帰って、話をしたい人がいたから。
ナナコ　私は、話をしても無駄だと思うな。会いに行っても、怖がられるだけよ。
ウラシマ　そのことについては、ちゃんと考えてある。なるべく爽やかな顔をして、何気なく話しかけるのさ。「やあ、久しぶり」。

ナナコ　かえって、不気味じゃないかな。
ウラシマ　そう思う前に、話をするのさ。「僕は別に何の恨みも持ってません。どうしても話したいことがあって、戻ってきたんです」。
ナナコ　何を言っても、聞いてもらえないんじゃないかな。アカネさん、きっと怒ってるだろうし。
ウラシマ　当たり前だろう？　自分の亭主が、知らない女と二人で死んだんだ。
ナナコ　普通の人なら、浮気してたって思うでしょうね。
ウラシマ　でも、それは誤解じゃないか。たとえ許してもらえなくても、話だけはしなくちゃ。
駅長　だったら、急いだ方がいい。帰りの列車は、明日の夜に出発します。その列車に乗り遅れると、二度と天上には戻れませんよ。
ウラシマ　ナナコ、頼む。
ナナコ　私は行かない方がいいと思う。
ウラシマ　せっかくここまで戻ってきたのに。
ナナコ　自分勝手はやめなさい。あんたはアカネさんにとって、一番会いたくない人なのよ。
ウラシマ　それは違うな。僕は二番で、一番はナナコだろう。
ナナコ　だから、逃げるのよ。
ウラシマ　ナナコ！

ナナコ・ウラシマが走り去る。反対側へ、駅長が去る。カニタニ・サルサワ・ウスイケがやってくる。後を追って、モモヤマがやってくる。

モモヤマ　違うよ違うよ。僕は幽霊じゃないよ。
カニタニ　幽霊じゃなかったら、何よ。
モモヤマ　僕はモモヤマと言いまして、この近くに住んでる———
サルサワ　変質者？
モモヤマ　違うよ違うよ。このカメラを見てくれよ。
ウスイケ　カメラ？
モモヤマ　（フラッシュをたいて）昨夜もここで会ったろう？　君たちに追いかけられて、今みたいに。
カニタニ　それじゃ、昨日のピカリはあんた？
モモヤマ　僕はプロのカメラマンなんだ。君たちと同じで、幽霊を追いかけてる。
カニタニ　私たちは幽霊なんか追いかけてません。なるべくなら、一生会わずに済ませいと思ってるんです。
モモヤマ　それなら、どうしてこんな時間に学校にいるんだ。
カニタニ　もう帰るところなんです。どいてください。
モモヤマ　その前に、一つだけ質問させてくれ。女の子に会わなかったか？
ウスイケ　女の子って？
モモヤマ　歳はたぶん、二十五、六。白いコートを着て、白いパンプスをはいてる。
サルサワ　（カニタニに）昨夜の人じゃないの？
モモヤマ　知ってるんだね？
サルサワ　昨夜、あなたに襲われた後、帰ろうと思って、校門まで来たら、突然話しかけられたのよ。
モモヤマ　やっぱり、校門か。
カニタニ　初めて会うのに、やけに馴れ馴れしくてさ。（腕時計を示して）この時計を

ウスイケ　くれたのよね。
カニタニ　あの人は「預かってくれ」って言ったのよ。
モモヤマ　私はコインロッカーじゃないのよ。一日取りに来なかったら、もう私の物よ。
モモヤマ　その時計、ちょっと見せてくれないか？（カニタニの手をつかむ）
カニタニ　（モモヤマの頬を叩いて）触らないで！
サルサワ　この人、やっぱり、変質者よ！
モモヤマ　違うよ違うよ。僕はだね———

カニタニ・サルサワ・ウスイケ・モモヤマが去る。ナナコがやってくる。後を追って、アヅチがやってくる。

アヅチ　動くな！　動くと、脱ぐぞ！
ナナコ　脱ぐ？　今、「脱ぐ」って言ったの？
アヅチ　俺はけっして変質者じゃない。しかし、真実を捕まえるためなら、何でもする。俺に脱いでほしくなかったら、質問に答えろ。
ナナコ　わかった。何でも答える。
アヅチ　質問その一、あなたは幽霊ですか？
ナナコ　はい。
アヅチ　え？　おおおまえ、やややっぱり、ゆゆ幽霊なのか？
ナナコ　イヤだ、本気にしたの？
アヅチ　何だ、嘘か。
ナナコ　嘘じゃないわよ。本物の幽霊よ。
アヅチ　そそそうなのか？

ナナコ　バカね。すぐに信じるんだから。
アヅチ　一体どっちが真実なんだ。正直に答えないと、脱ぐぞ！

そこへ、ムロマチがやってくる。

ムロマチ　アヅチ君、はしたない真似はやめなさい。
ナナコ　あなた、もしかして。
ムロマチ　こいつは私のアシスタントなんだ。無礼な真似をして、済まなかった。
ナナコ　（顔を背けて）私、これから行く所があるんです。失礼します。
ムロマチ　その前に、少し話を聞かせれくれないか。
ナナコ　（顔を背けて）インタビューなら、マネージャーを通してくれない？
ムロマチ　幽霊のくせに、態度がでかいな。死んでも死に切れなかった人間が、生きてる人間に偉そうな口をきくな。
ナナコ　（顔を背けて）私はちゃんと死にました。天国にも行ってきました。
ムロマチ　それなら、どうしてここにいる。
ナナコ　（顔を背けて）戻ってきたのよ、用事があって。私はどうでもよかったんだけど、ムロマチ君が、あっ！（口を押さえる）
ムロマチ　今、何て言った。ムロマチって言ったのか？
ナナコ　（顔を背けて）それじゃ、続きはまた明日。

ナナコが走り出す。行く手に、モモヤマが立ち塞がる。

モモヤマ　ほら、やっぱり幽霊は存在するでしょう？

ムロマチ　（ナナコに）おまえ、私を知ってるな？
モモヤマ　え？　先生の知り合いだったんですか？
ムロマチ　（ナナコに）私もおまえを知ってる。前にどこかで会ったことがある。
ナナコ　あら、私は初めてよ。
ムロマチ　確かに会った。十年か二十年前に。

そこへ、ウラシマがやってくる。

ウラシマ　十五年前だよ。僕と一緒に死んだんだ。
ナナコ　バカ！　そうやって、突然現れたら、驚くでしょう？
ウラシマ　そうか。（咳払いをして、ムロマチに）やあ、久しぶり。
ナナコ　ダメよ。やっぱり、驚いてる。
ウラシマ　（ムロマチに）驚かないで。僕は別に何の恨みも持ってません。どうしても話したいことがあって、戻ってきたんです。
ムロマチ　行くぞ、アヅチ、モモヤマ。
ウラシマ　アカネ！　一分だけでいいんだ。僕の話を聞いてくれないか。
ムロマチ　あんたのことは忘れたんだ。
ナナコ　ほら、やっぱり、聞く耳を持たないじゃない。

ナナコが走り去る。

ウラシマ　待てよ、ナナコ！（ムロマチに）必ずもう一度、会いに来るから。

ウラシマが走り去る。

モモヤマ　先生の知り合いだったんですね？
ムロマチ　亭主だよ。
アヅチ　亭主っていうと、旦那様？
ムロマチ　一緒になって、一年もしないうちに死んじまった。十五年前の冬の夜。

ムロマチ・アヅチ・モモヤマが去る。

クサナギがやってくる。椅子に座って、手紙を読む。

クサナギ　「図書室の整理はなかなか終わりませんでした。古い本を何百冊も運ばされて、腰は痛むし、手は疲れるし。時計が六時を回ったところで、ようやくミドリ先生が言いました。『続きは明日にしましょう。明日も手伝ってくれるわよね？』。私はニッコリ笑って、図書室を出て、小さな声で呟きました。手伝うわけねえだろう、バーカ」

アゲハがやってくる。反対側から、アゲハの母がやってくる。

アゲハ　ただいま。
アゲハの母　お帰りなさい、アゲハちゃん。お部屋に行く前に、こっちに来なさい。
アゲハ　お説教なら、後にして。私、おなかが空いちゃった。
アゲハの母　いいから、そこに座りなさい。
アゲハ　ハイハイ。でも、これだけは先に言わせて。アオタ先生がなんて言ったか知らないけど、私は何もしてないの。
アゲハの母　何もしてなかったら、先生がお電話をくださるわけないでしょう？
アゲハ　オーバーなのよ、あいつ。
アゲハの母　あいつとはなんですか、先生に向かって。

アゲハ　だって、私のこと、転落しかかってるって言うんだもん。
アゲハの母　あなたのことを心配してくださってるんでしょう？
アゲハ　余計なお世話なのよ。
アゲハの母　余計なお世話とはなんですか。アゲハちゃん、学校でサングラスをかけてるんだって？
アゲハ　あれは、太陽が眩しすぎるから。
アゲハの母　出しなさい。
アゲハ　出したら、返してくれないでしょう？
アゲハの母　勉強には必要ないものでしょう？　いいから、出しなさい。出しなさいってば！

ヤンマがやってくる。反対側から、ヤンマの母がやってくる。

ヤンマ　ただいま。
ヤンマの母　あ、お帰り、ミユキ。ちょっとこっちへ来てごらん。
ヤンマ　何よ。
ヤンマの母　いいからいいから。そこに座って、母ちゃんの目を見てごらん。
ヤンマ　にらめっこでもしようって言うの？
ヤンマの母　お、軽くかわしたね。かわすってことは、何か疚しいことがあるね。
ヤンマ　別に何も疚しいことなんかないよ。
ヤンマの母　だったら、母ちゃんの目を見てごらん。
ヤンマ　見たよ。
ヤンマの母　瞬きが多いね。

ヤンマ　母ちゃんだって、瞬きするでしょう？
ヤンマの母　やけに突っかかるね。やっぱり、疚しいことがあるね。
ヤンマ　何もないよ。プールの水は抜いたけど、別に疚しいとは思ってないもん。
ヤンマの母　プールの水を抜くのはいいことかい、悪いことかい。
ヤンマ　悪いことだよ。
ヤンマの母　他人様にも迷惑がかかるし、水だってもったいないよね？　どう考えたって、悪いことだよ。悪いことをしておいて、どうして疚しくないんだい。
ヤンマ　だって、ちゃんと罰を受けたし。
ヤンマの母　罰さえ受ければ、何をやってもいいって言うのかい？

カブトがやってくる。

カブト　ただいま。
クサナギ　お帰り。
カブト　やっぱり、誰もいない。

カブトが腰を下ろして、テレビを点ける。

アゲハの母　（アゲハに）どうしても出さないんなら、ママもあなたに夕食を出しませんからね。
アゲハ　そんなの、ずるい。図書室の整理で、おなかがぺこぺこなのよ。
ヤンマの母　（ヤンマに）悪いことをしたら、反省しなくゃダメだよ。反省しない子には、夕御飯を食べさせないからね。

ヤンマ　反省はしてるよ。
アゲハ　（アゲハの母に）反省してるから、夕御飯を食べさせてよ。
アゲハの母　だったら、サングラスを出しなさい。
ヤンマの母　（ヤンマに）サングラスまで、勝手に持ち出したりして。父ちゃん、怒ってたよ。
ヤンマ　取ったんじゃないよ。借りたんだよ。（サングラスを差し出す）
アゲハ　（アゲハの母に）私のお金で買ったんだからね。学校には持っていかないから、後で返してよね。（サングラスを差し出す）
アゲハの母　（受け取って）こういうものをかけたがるのは、心が乱れてる証拠よ。
ヤンマの母　（受け取って、ヤンマに）こういうものは似合う人がかけなくちゃ。父ちゃんにもあんまり似合わないから、母ちゃんが使うからね。
ヤンマ　鏡を見てよ。
アゲハ　（アゲハの母に）ほら、見てよ。私のどこが乱れてるって言うの？
ヤンマの母　（ヤンマに）やっぱり、似合ってるじゃないか。
アゲハの母　（アゲハに）ママの目はごまかせません。あなた、最近、帰りが遅いでしょう。どこに行ってるの？
ヤンマの母　（ヤンマに）夜中に外を出歩くのも、感心しないね。子供は九時に寝るって、昔から決まってるんだ。
アゲハの母　（アゲハに）お友達の家だなんて、嘘でしょう？　ディスコとか、いかがわしい場所に行ってるんじゃないの？
アゲハ　行ってないよ。本当は、お寺巡りをしてるの。幽霊に会うために。
アゲハの母　幽霊に？　ウッ！（気を失って倒れる）
ヤンマの母　ハッ！（アゲハの母の体を支える）

ヤンマ　何してるの、母ちゃん？
ヤンマの母　今日から、社交ダンスの教室に通い始めてね。その復習だよ。
アゲハの母　（体を起こして、アゲハに）あなた、幽霊が怖くないの？
アゲハ　怖くないよ。
ヤンマ　（ヤンマの母に）私は幽霊より、水の方が怖いの。
ヤンマの母　そんなの、最初のうちだけだよ。慣れれば、大好きになるさ。
アゲハの母　（アゲハに）明日から、お寺巡りは禁止よ。それから、水泳の補習に行くのも禁止。
ヤンマの母　（ヤンマに）泳げるようになったら、父ちゃんと三人で海に行こう。海で泳ぐと、気持ちいいよ。
アゲハの母　（アゲハに）あなたは泳げるんだから、補習に行く必要はないでしょう？
ヤンマの母　（ヤンマに）海には他にも楽しいことがある。ボーイフレンドが作れるんだ。母ちゃんだって、海で父ちゃんを捕まえたんだよ。このナイスバディで。
ヤンマ　私は図書館で捕まえるから、いい。
アゲハ　（アゲハの母に）私は、ヤンマに泳げるようなってほしいの。だから、一緒に付き合ってるんじゃない。
アゲハの母　ヤマダさんはヤマダさん。あなたはあなたでしょう？
ヤンマの母　（ヤンマに）そりゃ、おまえにはおまえの考えがあるだろうけどさ。「泳ぐのはイヤだ。だから、プールの水を抜く」っていうのは、間違いだろう？
ヤンマ　でも――――
ヤンマの母・アゲハの母　話はこれでおしまい。自分の部屋へ行きなさい。
ヤンマ・アゲハ　夕御飯は？
アゲハの母　ダイエットしたかったんじゃないの？

ヤンマの母　（ヤンマに）今夜は寿司でも取ろうかね。

アゲハの母・ヤンマの母が去る。後を追って、ヤンマも去る。

クサナギ　「こうして、私のダイエットは着々と進んでいます」

アゲハ　三枚のはずが、大分オーバーしてしまいました。国語の先生には、大河ドラマのように読みごたえがあったと伝えておいてください。

クサナギ　また途中でおしまいか？

アゲハ　途中じゃないでしょう？　ちゃんと一日の出来事、全部書いたじゃない。

クサナギ　ウラシマとナナコはどうなったんだ。

アゲハ　今の時点では、私にもわかりません。

クサナギ　次はカブトの番だな。あいつにも、手紙を書くように言ってくれよ。

アゲハ　カブトは、国語が大の苦手だったでしょう？

クサナギ　そうだった。あいつの字は、男の僕より汚いんだった。

アゲハ　一応言っておくけど、あんまり期待しないでください。

クサナギ　それなら、アゲハが書いてくれよ。この勢いで、明日もサラサラーッと。

アゲハ　これで、国語の宿題はおしまい。次は数学の問題集だ。

クサナギ　手紙ぐらい、一時間もあれば書けるだろう？

アゲハ　来年、こういう宿題が出たら、書きますから。

クサナギ　一年も待てないよ。

アゲハ　八月十五日、オオシマアゲハ。

クサナギ　そう言えば、ナナコが読んでた、死後の世界の本。あの本はどうした？

アゲハ　追伸、ナナコの本は、私も気になってたんです。明日、学校に行って、読ん

でみようっと。
クサナギ　題名はなんていうんだ。
アゲハ　『ナツヤスミ語辞典』
クサナギ　よし、明日、ブック・オフで探してみよう。

アゲハが去る。ムロマチがやってくる。

ムロマチ　ただいま。
カブト　お帰り。また仕事？
ムロマチ　まあね。
カブト　今日の夕飯は、母さんの番だからね。
ムロマチ　わかってるよ。それより、カズコ。あんたの学校、幽霊が出るんだって？
カブト　どうして知ってるの？
ムロマチ　近所で評判になってるのよ。
カブト　私、会ったよ。
ムロマチ　いつ。
カブト　昨日も今日も。男の幽霊と女の幽霊。
ムロマチ　話はした？
カブト　少しね。
ムロマチ　そう。
カブト　男の人はプロのカメラマンなんだって。今から十五年前に死んだみたい。その人が写真を撮ると、十五年前の景色しか写らないだ。
ムロマチ　カメラを持ってたの、その幽霊。

カブト　そうじゃなくて。
ムロマチ　私のカメラを持ち出して、幽霊に貸したな？
カブト　ごめん。
ムロマチ　私のカメラを使うのはいいけど、他の人に貸すのはやめてよね。
カブト　もう貸さない。約束する。
ムロマチ　それからさ、あんた、幽霊は怖くないみたいだけど、あんまり仲良くならない方がいいんじゃない？
カブト　仲良くなんか、なってないよ。
ムロマチ　それなら、いいけど。
カブト　このカメラ、私にくれない？
ムロマチ　いいよ。
カブト　本当？　これ、一番古いカメラで、一番大切にしてたんじゃないの？
ムロマチ　別に。最近、あんまり使ってないし。
カブト　私、アルバムを作ろうと思うんだ。自分のアルバム。
ムロマチ　私がアルバム嫌いなの、知ってるでしょう？
カブト　いいじゃない。私のなんだから。母さんは撮らないし。
ムロマチ　ねえ、カズコ、写真っていうのはね――
カブト　過去を懐かしむために撮るんじゃない。真実を捕まえるために撮るんだ。
ムロマチ　わかってるなら、どうして。
カブト　真実って、大切なものでしょう？　私は私の真実を大切にしたいの。
ムロマチ　真実っていうのは、そんなに簡単に捕まらないのよ。あんたの腕じゃ、まだまだね。

カブト・ムロマチが去る。

郵便屋が自転車に乗って、やってくる。

郵便屋　クサナギさん、郵便です。
クサナギ　やっぱり、来てくれると思ってたんだ。今日の手紙はカブトからだろう？
郵便屋　いいえ。
クサナギ　それじゃ、アゲハから？　まあ、話の続きさえわかれば、どっちでもいいや。
郵便屋　今日は、手紙はありません。
クサナギ　ないの？　それなら、どうしてここに来たの？
郵便屋　約束したでしょう？　昨日書いてた手紙を取りに来るって。
クサナギ　あれは、まだ書き終わってない。
郵便屋　丸一日あったのに？
クサナギ　そのかわり、今度はアゲハに書いた。（ハガキを出し）「前略、続きを読みたし。至急送れ。クサナギ」
郵便屋　電報みたいな手紙ですね。どうせなら、電報にした方がいいんじゃないですか？
クサナギ　郵便局員が、手紙の内容にケチつけていいの？
郵便屋　失礼しました。それじゃ、お預かりします。（手を出す）
クサナギ　（ハガキを引っ込めて）本当に、今日は一通も届いてないの？
郵便屋　宇宙一の郵便屋が、嘘をつくわけないでしょう？　なんちゃって。（封筒を

出す）

クサナギ　あっ！　貴様、騙したな？

郵便屋が逃げる。クサナギが後を追う。

郵便屋　ひいきされた生徒さんにかわって、天誅を下したんですよ。

クサナギ　こら、待て！　待たないと、郵政大臣に言いつけるぞ！

郵便屋　あっ！

クサナギ　何だよ。

郵便屋　あなた、松葉杖は？

クサナギ　あっ！　治ってたのか。

郵便屋　ごまかしてもダメです。あなた、僕を三日間も騙してましたね？

クサナギ　そんなの、お互い様だろう？

郵便屋　先に騙したのは、あなたの方ですよ。どうして治ってないフリをしたんです。

クサナギ　だって、怪我もしてないのに、家でブラブラしてたら、失業者みたいじゃないか。

郵便屋　それじゃ、あなた、最初から怪我なんかしてなかったんですか？

クサナギ　怪我はしたよ。刑事ドラマの犯人役で、東京駅のロケ。あの仕事がうまく行ってれば、小さな役だけど、レギュラーがもらえるはずだったんだ。それなのに、怪我のおかげで、すべてがパー。それ以来、誰からもお呼びがかからない。僕みたいなオッチョコチョイは、信用できないんだってさ。

郵便屋　それで、採用通知を待ち焦がれてたんですか。

クサナギ　これが最後に残された、たった一つの仕事なんだ。これがダメなら、僕の人

郵便屋　生はおしまいなんだ。
クサナギ　しかし、これは採用通知じゃないようですね。（封筒を差し出す）
郵便屋　（受け取って）ムロマチカズコ？　やっぱり、カブトか。
クサナギ　あなたは生徒さんに人気があるんですね。しかも、女の生徒さんに。
郵便屋　こいつらに好かれても、あんまりうれしくないけどね。
クサナギ　あなたみたいないい加減な人がどうして。
郵便屋　そうなんだよな。僕なんか、ちっともいい先生じゃなかったし、いい先生になろうって気もなかったのに。
クサナギ　それなら、どうして先生になったんですか？
郵便屋　夏休みがあるからさ。

クサナギが手紙を開く。別の場所に、カブトが現れる。

カブト　どうして夏休みには終わりがあるんだろう。このまま夏休みが終わらなければ、どんなに素敵だろう。八月三十一日が来るたびに、私は悔しくてたまりません。
クサナギ　日本には四季がある。夏の陽差しも気持ちいいけど、秋の風だって捨てたもんじゃないよ。
カブト　私には、季節は二つしかありません。夏と、夏を待つ間。
クサナギ　待つってことが大切なんだな。夏休みが終わらなかったら、夏休みのすばらしさを忘れてしまう。
カブト　そうかな。
クサナギ　桜の花は散るからこそ美しい。

カブト　散らない桜がないから、そう思うんだ。一年中咲いてたら、一年中お花見ができるんだよ。

クサナギ　いいねえ。一年中、酒が飲める。

カブト　夏休みだって、同じさ。実際に終わらない夏休みを過ごしてみなくちゃ、いいか悪いか、わからない。

クサナギ　僕にはわかる。終わらないっていうのは、恐ろしいものなんだ。時間の流れは冷たい。人間なんかお構いなしに流れていく。時々、自分で止まらくちゃ、頭がおかしくなっちまう。

カブト　夏休みが嫌いなんだな？

クサナギ　そんなこと言ってないだろう？

カブト　好きなら、終わってほしくないはずだ。

クサナギ　今は好きでも、いつかは嫌いになるかもしれない。好きなままでいたかったら、嫌いになる前に、自分の手で終わらせるしかないんだ。

カブト　自分の手で？

クサナギ　それはけっして、恥ずかしいことじゃない。

郵便屋　クサナギさん、郵便です。

クサナギ　あれ？　もう一通あったの？

郵便屋　あなたがずっと待ってた手紙です。（封筒を差し出す）

クサナギ　（受け取って）まさか、採用通知なのか？

郵便屋　でも、その封筒は、学校のものですね。

クサナギ　（手紙を開いて）合格だ！　九月一日から、学校に来いってさ。

郵便屋　また先生になるんですか。

クサナギ　三年前と同じ、産休代用教師だけどね。新しいカブトたちが、僕のことを待

ってるんだ。

郵便屋　渡そうか渡すまいか、ずっと迷ってたんですが。

クサナギ　それじゃ、やっぱり、この手紙は。一週間前に着いてたんだな？

郵便屋　あなたの夏休みも、これで終わりですね。

郵便屋が自転車に乗って、去る。

カブト　暑中お見舞い申し上げます。最初に言っておきますが、私はクサナギ先生が嫌いです。小学校から今まで、いろんな先生に習ってきたけど、クサナギ先生くらい不真面目な先生はいませんでした。アゲハは「先生らしくなくていい」って言ってたけど、先生っていうのは勉強を教えるのが仕事でしょう？

クサナギ　私には、クサナギ先生に何かを教わったって記憶が全くありません。

カブト　僕にも、何かを教えたって記憶は全くない。ごめん。でも、一つだけ忘れられないことがあります。図画工作の授業で、校庭の景色を描いた時、私は桜の木を緑色に塗った。その時、季節は冬で、枝には葉が一つもなかったのに。ヤンマもアゲハも笑ったけど、先生だけは笑わなかった。「僕はカブトの絵が好きだ。カブトには、僕らに見えないものが見えたんだ」って。

クサナギ　ごめん、その記憶も全くない。

カブト　だから、この手紙を先生に送ろうと思ったんです。同封した写真を見てください。

クサナギ　誰だい、この人？

カブト　先生なら、その写真の意味がわかるんじゃないかと思って。

クサナギ　写真のことなら、お母さんに聞けばいいだろう。
カブト　私が知りたいのは、その人が誰かということです。
クサナギ　わかった。こいつも役者なんだな？　でも、売れない役者は星の数ほどいるからね。
カブト　役者じゃありません。その人とは一昨日初めて会ったのに、初めてって気がしなかった。何だかとっても懐かしかったんです。その人と会ったのは、うちの学校のプールでした。そして、その人と別れたのは――――

ヤンマが飛び出す。後を追って、アオタ先生・カニタニ・サルサワ・ウスイケが飛び出す。

アオタ先生　ヤマダ、先生は怒ったぞ。今日という今日は怒ったぞ。
カニタニ　ヤマダさん、あなたがプールの水を抜くのは、補習を中止にするためじゃなくて、先生を殺すためだったのね？
サルサワ　（ヤンマに）今日なんか、空中回転をして、飛び込んだのよ。生きてる方が不思議なくらいよ。
カブト　死ぬ前に、ミイラ男になりそうだな。
カニタニ　ヤマダさん、あなた、いつ学校に来たの？
ヤンマ　今朝四時に起きて。「早起きは三文の得」って言うでしょう？
アオタ先生　早起きを悪用するヤツがあるか！
ウスイケ　（ヤンマに）気が付かなかった。朝来れば、幽霊に会わずに済むんだ。
カブト　そんなことないよ。この学校の幽霊は、夜も昼もお構いなしに出るんだから。
カニタニ　そうなのか？
アオタ先生　先生なんか、昨日、二人も見たぞ。話までしちゃったんだ。

サルサワ　幽霊は苦手じゃなかったんですか？
アオタ先生　それが実際に会ってみると、ちっとも怖くないんだな。カニタニ、おまえなら勝てるぞ。
カニタニ　得意の張り手をぶちかましてやるか。
サルサワ　バチンと叩こうと思って、手が顔を通り抜けたら？
カニタニ　先生、私、おなかが痛い。早退します。
ヤンマ　諦めた方がいいんじゃない？　この学校は、幽霊が集まる駅なんだって。私たちに何かしようっていうんじゃないんだから、仲良くするしかないのよ。
カニタニ　どうして幽霊と仲良くしなくちゃいけないのよ。
ウスイケ　（ヤンマに）「友達は選びなさい」って、ママに言われた。
ヤンマ　それは、私からも言いたい。友達は選びなさい。
カニタニ　あんたに言われる筋合いないわよ。私だって、ムロマチさんに同じことを言いたいのに、グッとこらえてるのよ。
アオタ先生　おまえたち、友情を壊し合うんじゃない。
ヤンマ　それで、今日の罰は何ですか？
カニタニ　決まってるじゃない。トイレ掃除よ。
サルサワ　今日はオオシマさんがいないから、時間がかかるわね。
カニタニ　オオシマさんには冬休みにやってもらうからいいわ。
アオタ先生　カニタニ、冬休みの計画まで立てるな。（ヤンマに）トイレ掃除はまた後でいい。ここでしばらく待ってるんだ。
カニタニ　さては、もっと重い罰ですか？
サルサワ　先生方を集めて、臨時の職員会議？
ウスイケ　始末書？　停学？　まさか、退学？

カブト　義務教育に退学があるか？
カニタニ　（アオタ先生に）それなら、せめて停学ですよね？　でも、夏休みに停学なんて、意味がない。
アオタ先生　お母さんに来てもらうんだ。俺が言ってもダメ、お母さんが言ってもダメなら、ＰＴＡでスクラムを組むしかない。
カニタニ　なるほどね。
カブト　（アオタ先生に）うちの母親は呼ばないですよね？
アオタ先生　ムロマチ、おまえのお母さんは重要な戦力になるんだ。
ウスイケ　ミドリ先生はどうしましょう？
アオタ先生　そうだな。おまえたちの担任なんだから、一応呼んだ方がいいだろうな。

アオタ先生が去る。

ウスイケ　いつもと違う。
サルサワ　昨日の帰り、ミドリ先生に言われたらしいわ。「迷惑です」って。
カニタニ　ヤマダさん、アオタ先生は今、手負いの虎よ。いつもより凶暴になってるから、気を付けた方がいいわね。

カニタニ・サルサワ・ウスイケが去る。

クサナギ　「アオタ先生なんて、別に怖くありません。教師が生徒に暴力を振るったらどうなるか。いくら体力バカでも、知らないわけがない。それより、問題はうちの母さんです。写真の世界は、男の社会。若い頃は、先輩のカメラマンに、何度も叩かれたそうです。だから、母さんもすぐに手が出る。しかも、平手じゃなくて、ゲンコツです。あれで女とは思えません。今日こそはゲンコツだ。そう思って、落ち込んでいると」

ナナコがやってくる。

ナナコ　ハーイ、元気？　私は死んでるけど、元気。
カブト　やめろ。こっちに来るな。
ナナコ　まあまあ、そう言わないで。ちょっと聞きたいことがあるんだけどさ。あなたたち、カニタニって子、知らない？
カブト　知ってるよ。ついさっきまで、ここにいた。
ナナコ　今、どこにいる？
カブト　さあね。今日の補習は中止になったから、家に帰ったんじゃないか？
ヤンマ　（ナナコ）カニタニさんに何の用？　まさか、とりつこうって言うの？
ナナコ　私がそんなことをする人間に見える？

ヤンマ　じゃ、どうしてさっさと成仏しないのよ。
ナナコ　私はもう成仏したの。一度天国に行って、戻ってきたの。
ヤンマ　どうしてわざわざ戻ってきたのよ。
ナナコ　人を邪魔者扱いして。いいじゃない。どうせ、今夜、帰るんだから。
カブト　銀河鉄道が迎えに来るの？
ナナコ　そうよ。出発は、夜中の十二時。
カブト　ウラシマさんも帰るの？
ナナコ　ウラシマ？　あ、そうそう。あの人も一緒にね。
カブト　あの人、プロのカメラマンなんだろう？
ナナコ　大学時代から、写真が好きでさ。一人で撮影旅行に行ってた。
ヤンマ　鳥なんか撮って、何が楽しいのかな。
カブト　ウラシマさんは、オオワシとかノグチゲラとか言ってたろう？　そいつらは二つとも、日本の天然記念物なんだ。ノグチゲラなんか、地球上で、沖縄の北の方にしかいないんだってさ。しかも、百羽ぐらいしか。

ナナコ　詳しいのね。
カブト　昨日、本で調べたんだ。写真に関することは、何でも知っておきたいから。
ナナコ　あなたも写真が好きなの？
カブト　好きっていうか、母親がカメラマンだから、自然とね。
ナナコ　あなたの苗字、ムロマチよね？　お母さんの名前は、アカネ？
カブト　そうだよ。知ってるの？
ナナコ　昨夜、会ったのよ。
カブト　母さん、学校に来たの？　そんなこと、一言も言ってなかったのに。
ナナコ　お父さんは亡くなったんだって？

カブト　私が生まれる前にね。私が母さんのおなかにいる時、交通事故で死んだんだ。
ナナコ　再婚はしてないの？
カブト　そういうつもりは全然ないみたい。写真だけが生き甲斐って感じ。
ヤンマ　カブトのお父さんのことが忘れられないんじゃない？
カブト　それはないよ。父さんの話は絶対にしないし。だから、私は顔も知らない。
ナナコ　アルバムがあるでしょう？
カブト　母さん、アルバムが嫌いなんだ。「写真はアルバムに貼るために撮るんじゃない」って言って。
ナナコ　知りたいとは思わないの？
カブト　小学四年の時だったかな。親戚の叔父さんに聞いたんだ。「私の父さんはどんな人だったの？」って。最初は渋ってたけど、しつこく聞いたら、やっと教えてくれた。父さんは、よその女の人と一緒に死んだんだ。
ヤンマ　それはつまり、浮気してたってこと？
カブト　そうとしか考えられないだろう？　母さんは父さんが許せないんだ。だから、何も言わないんだ。
ナナコ　でも、せめて顔ぐらいは知りたいでしょう？
カブト　今は別に。母さんは私に教えたくないんだ。だったら、私も知りたくない。
ナナコ　でも――――
カブト　私の話はもういいだろう？　さっさとカニタニの家に行けよ。
ナナコ　そう言われても、住所も電話番号も知らないし。
ヤンマ　あなた、カニタニさんの知り合いじゃないの？
ナナコ　一昨日の夜、ここで会ったのよ。こんな遅い時間にいるんだから、私と同じ幽霊だろうと思ったんだけど。

ヤンマ　違う違う。あの人、私がプールの水を抜くところを撮りに来たのよ。
ナナコ　だから、カメラを持ってたんだ。
ヤンマ　そうか。あなたはカニタニさんに写真を撮られたのね？　その写真がほしくて、カニタニさんを探してるんでしょう？
カブト　バカだな。あんたは幽霊なんだから、写真には写らないよ。会いに行っても無駄さ。
ヤンマ　（ナナコに）諦めて、天国に戻ったら？　ほらほら。
ナナコ　ちょっと待って。
ヤンマ　何よ。
ナナコ　彼が撮った写真には、十五年前の景色が写ってた。ということは、私が写真を撮っても、やっぱり十五年前の景色が写るってことよね？
カブト　たぶんね。でも、それがどうかした？
ナナコ　このカメラ、貸して。（カブトの手からカメラを取る）
カブト　ダメダメ。人には貸さないって約束したんだ。
ナナコ　いいじゃない、貸してよ。
カブト　返せよ。こら、ナナコ！

ナナコが走り去る。後を追って、カブトが走り去る。

クサナギ　こら、カブト！　先生が「待ってろ」って言ったのを、忘れたのか？
ヤンマ　私も帰っちゃおうかな。
クサナギ　ダメダメ。悪いことをしたら、男らしく罰を受けなくちゃ。
ヤンマ　私は女の子です。

クサナギ　それに、逃げたって思われるのはイヤだろう？
ヤンマ　そうだ。私は逃げないって決めたんだ。逃げないぞ。逃げてたまるか。

そこへ、ミドリ先生・アオタ先生・ヤンマの母・アゲハの母・アヅチ・モモヤマがやってくる。

ヤンマの母　ミユキ！　おまえ、またやったんだって？
ミドリ先生　まあまあ、ヤマダさんのお母さん、怒らないで。
ヤンマの母　これが怒らずにいられますか。あれほど、他人様に迷惑をかけるんじゃないって言ったのに。（ヤンマに）こっちにおいで。
ヤンマ　イヤだ。
ヤンマの母　いいから、こっちにおいで。
ヤンマ　イヤだ。母ちゃん、ぶつもん。
ヤンマの母　ぶたれるようなことをしたのは誰だい！
アオタ先生　まあまあ、ヤマダさんのお母さん、暴力はいけません。
ヤンマの母　痛い思いをしなくちゃ、わからないんですよ。甘やかしたら、つけあがるんだから。大体、先生方が甘やかすから、三回も同じ悪さを繰り返すんですよ。
アオタ先生　私がいつ甘やかしました？
ミドリ先生　まあまあ、アオタ先生。
ヤンマの母　一回目の時にガツンとやってくれれば、こいつだって反省したんですよ。
ミドリ先生　体罰はいけませんわ。中学生にもなったら、話してわからせなくちゃ。
ヤンマの母　話してわからないんだから、叩くしかないでしょう？　全く、先生なんて、口だけ達者で、全然頼りにならないんだから。

アオタ先生　口だけとはなんですか。私は筋肉だって――――
ミドリ先生　まあまあ、アオタ先生。（アオタ先生の腕をつかむ）
ヤンマの母　昼間っからイチャイチャして。子供より、恋人の方が大事ってことですか。
ミドリ先生　恋人なんかじゃありません！
アオタ先生　まあまあ、ミドリ先生。
アゲハの母　やっぱり、アゲハは来てないんですか？
アオタ先生　ヤマダ、今日はオオシマに会ったか？
ヤンマ　会ってない。
アゲハの母　私に黙って、家を出ていったのよ。どこに行ったか、知らない？
ヤンマ　知らない。
アゲハの母　でも、アゲハは昨日も一昨日も、あなたに付き合って、学校に来たんでしょう？　まさか、途中で誘拐されたんじゃ。ウッ！（気を失って倒れる）
アヅチ　奥さん！（アゲハの母の体を支える）
ミドリ先生　（アヅチ・モモヤマに）あら、あなたは？
モモヤマ　僕らはムロマチの母親の代理です。
ミドリ先生　「お母さんに来てほしい」って言ったはずですけど。
モモヤマ　それはちゃんと伝えたんですが、「学校には行きたくない」って。
アヅチ　（モモヤマを叩いて、ミドリ先生に）「行きたいけど、行けない」って。どうしても今日中にやらなくちゃいけない仕事がありまして。
モモヤマ　仕事なんかしてなかったじゃないか。
アヅチ　（モモヤマを叩いて、ミドリ先生に）くれぐれもお詫び申し上げるようにと言づかりました。
モモヤマ　おまえ、嘘がうまいなあ。

アヅチ　（モモヤマを叩いて、ミドリ先生に）それで、カズコ君は？
アオタ先生　ヤマダ、ムロマチはどうした？
ヤンマ　行っちゃった。
ミドリ先生　行っちゃったって、どこへ？
ヤンマ　ナナコがカメラを持って逃げたから、それを追いかけて――――
モモヤマ　ナナコって、幽霊の？
アゲハの母　幽霊？　この学校には幽霊は出るんですか？
ヤンマの母　奥さん、知らなかったんですか？　この近所じゃ、有名ですよ。
アゲハの母　まさか、アゲハも一緒じゃないでしょうね？　アゲハが幽霊に誘拐されたんだとしたら、私はどこに訴えればいいんですか？
ヤンマの母　妖怪ポストに手紙を出すんですよ。そうすれば、鬼太郎が――――
アゲハの母　奥さん、こういう時に冗談はやめてください。
アオタ先生　ヤマダ、おまえはどうして一緒に行かなかったんだ。
ヤンマ　私は悪いことをしたんだから、罰を受けます。
ヤンマの母　居直るんじゃないよ、子供のくせに。
ミドリ先生　ヤマダさん、先生は罰を受けさせるために、お母さんをお呼びしたんじゃないのよ。あなたに反省してほしいから。
ヤンマの母　無駄無駄。口で言っても、無駄よ。
ミドリ先生　反省しなかったら、明日も水を抜くでしょう？
ヤンマ　泳ぎたくないのよ。私は絶対に泳ぎたくないの。
アオタ先生　中学生にもなって、泳げなくてどうする。
ヤンマ　私は死ぬまで泳げなくていいの。
ミドリ先生　逃げちゃダメよ、ヤマダさん。

ヤンマ　私は逃げなかった。
ヤンマの母　何言ってんだい、水を抜いておいて。
ヤンマ　抜いたけど、逃げなかった。
ヤンマの母　水からは逃げ回ってるじゃないか。
ヤンマ　母ちゃんにはわからないのよ、水の怖さが。
ヤンマの母　わかりませんね。
ヤンマ　私の気持ちがわからないのよ。
ヤンマの母　図々しいこと、言うんじゃないよ。
ヤンマ　何が図々しいのよ。私は「泳ぎたくない」って言ってるだけなのよ。どうして認めてくれないの？　大人になれば、「泳ぎたくない」って言えば、泳がなくて済むでしょう？　どうして大人はよくて、中学生はダメなのよ。
ミドリ先生　ヤマダさん、私も昔は水泳が苦手だったのよ。確かに今は泳がないけど、中学生の時は、我慢して泳いだわ。
アオタ先生　（ヤンマに）先生も我慢して、掃除したぞ。
ヤンマの母　（ヤンマに）私も我慢して、宿題をやったよ。
アゲハの母　（ヤンマに）私も我慢して、給食を食べた。
アヅチ　（ヤンマに）俺も我慢して、朝練に行った。
モモヤマ　（ヤンマに）僕も我慢して、委員をやった。
ミドリ先生　（ヤンマに）みんな、我慢してきたのよ。どうしてあなただけ、我慢できないの。
ヤンマ　たくさん我慢してるじゃない。授業だって、制服だって、校則だって。どんにバカらしいと思っても、どんなに苦しいと思っても、私は絶対に逃げなかった。でも、泳ぐのだけは我慢できないのよ。一つくらい我慢できなくても、

仕方ないでしょう？　どうしてわかってくれないの？

クサナギが立ち上がる。

クサナギ　ヤンマ、玉手箱を開けるんだ。
ヤンマ　玉手箱？
クサナギ　よく頑張った。先生やお母さんを相手に、一人でよく戦った。でも、もうおしまいだ。
ヤンマ　イヤだ。私は最後まで戦う。
クサナギ　もうダメだ。セコンドの僕がタオルを投げる。これ以上戦ったら、君は二度と立ち上がれなくなる。
ヤンマ　立ち上がれなくても、戦う。最後まで戦う。
クサナギ　今がもう最後なんだ。玉手箱を開けよう。
ヤンマ　玉手箱って、何よ。
クサナギ　夏休みを終わらせるんだ。
ヤンマ　イヤだ！

ヤンマが走り去る。後を追って、ミドリ先生・アオタ先生・ヤンマの母・アゲハの母・アヅチ・モモヤマが走り去る。

１１

ナナコがやってくる。後を追って、カブトがやってくる。

カブト　待てよ、ナナコ。どこまで行くんだよ。
ナナコ　私たちが死んだ場所。
カブト　私たちって、ナナコとウラシマさん？
ナナコ　そうよ。私たちは十五年前に、一緒に死んだの。駅前の十字路で。
カブト　もしかして、交通事故？
ナナコ　トラックに撥ね飛ばされて、地面に叩きつけられて。人生まだこれからだったのに。
カブト　でも、事故の現場なんかに行って、何を撮るんだよ。
ナナコ　わからないかな。あの人が撮った写真には、十五年前の景色が写ってた。それはたぶん、あの人の時間が十五年前に止まったからよ。あの人が死んだ瞬間に。ということは、私が写真を撮れば、私が死んだ瞬間の景色が写る。
カブト　待てよ。そんなことをしたら、あんたの死体が写るじゃないか。
ナナコ　私じゃなくて、あの人を撮るの。
カブト　ウラシマさんだって、死体じゃないか。
ナナコ　あの人はすぐに死ななかったの。私は即死だったけど、あの人は病院に運ばれるまで、意識がはっきりしてたんだから。

カブト　瀕死の重傷だったんだろう？　顔なんか、グチャグチャだったんじゃないか？
ナナコ　それは現像してからのお楽しみ。
カブト　冗談じゃない。私は、怪談とかホラーとか大嫌いなんだ。どうしてそんな写真を撮らなくちゃいけないんだよ。
ナナコ　クリスマス・プレゼントよ、私からの。
カブト　クリスマス？　夏なのに？
ナナコ　私たちが死んだのは、冬だったの。十五年前のクリスマスイブ。

ナナコがカブトにカメラを渡す。そこへ、ウラシマがやってくる。

ウラシマ　悪かったな、急に呼び出して。
ナナコ　あなたって人は、どうしていつもこうなの？　何か困ったことがあるたびに、「ナナコ」って。
ウラシマ　おまえ以外に頼めるヤツがいないからだよ。
ナナコ　結婚して、初めてのクリスマスでしょう？　プレゼントくらい、自分で選びなさいよ。
ウラシマ　苦手なんだよ、そういうの。女が喜びそうなものなんて、わからないし。
ナナコ　何でもいいのよ。好きな人がくれるものなら、安物だって、趣味が悪くたって、うれしいものなの。
ウラシマ　あいつはそういう女じゃない。気に入らないものは、「こんなのいらねえよ」って、はっきり言うんだ。
ナナコ　そんなことないって。心を込めてプレゼントすれば、きっとわかってくれる。
ウラシマ　どうせなら、「こいつがほしかったんだよ」って、言わせたいじゃないか。

ナナコ　だから、女の目で選んでほしいんだよ。
ウラシマ　でも、私が選んだってわかったら、奥さん、怒らない？
ナナコ　どうしてあいつにわかるんだよ。
ウラシマ　私が電話するからよ。
ナナコ　人の家庭を壊すんじゃない！
ウラシマ　大体、新婚三カ月で、他の女とデートしていいの？
ナナコ　デートなんてしてないじゃないか。
ウラシマ　今、私としてるでしょう？
ナナコ　これは断じて、デートじゃない。
ウラシマ　デートよ。若い男と若い女が、クリスマスイブに、腕を組んで歩いてるのよ。
（ウラシマの腕をつかむ）
ナナコ　腕を組むな！（ナナコの腕を振りほどく）
ウラシマ　どう見たって、デートよ。浮気よ。
カブト　問題は二人の気持ちだろう？　学生の頃だって、映画を見たり、授業の帰りに喫茶店に寄ったりしたけど、デートだなんて思わなかったじゃないか。
ナナコ　ナナコはデートだって思ってたんだ。
カブト　思ってないわよ。
クサナギ　絶対に思ってた。ねえ、先生？
ナナコ　僕もそう思う。
クサナギ　違うって言ってるでしょう？
ナナコ　ずっと前から好きだったのに、ウラシマさんは気づかなかった。気づいてくれるのを待ってたのに。
ナナコ　うるさいわね。黙ってなさいよ。

ウラシマ　そうだ。あいつは時計を持ってないんだ。
ナナコ　そう言うあなたも持ってないわね。
ウラシマ　僕のはあいつに貸してるんだよ。大学に入った時に買ったやつでさ、安物だし、いい加減、ガタが来てると思うんだ。
ナナコ　時計なら、自分で選べるでしょう？
ウラシマ　ナナコ。
ナナコ　わかったわかった。でも、奥さんが気に入るかどうかは、責任持たないからね。私の趣味で選ぶからね。
ウラシマ　え？　こんなの、高すぎるよ。
ナナコ　こっちもわりかしいいよね。
ウラシマ　こっちも高い。ナナコ、ショーケースじゃなくてさ、こっちの、壁にぶら下がってるヤツにしようよ。
ナナコ　ケチケチするんじゃないの。結婚して、初めてのプレゼントでしょう？
ウラシマ　結婚式と新婚旅行で、貯金がゼロなんだ。お小遣いだって、あいつ、ちょこっとしかくれないし。
ナナコ　撮影旅行を一回我慢すれば、買えるって。
ウラシマ　ナナコ。
ナナコ　すみません。これ、ください。
ウラシマ　バカバカ。本当に買うのか？
ナナコ　「こいつがほしかったんだよ」って、言わせたいんでしょう？
ウラシマ　言わなかったら、家出してやるからな。
ナナコ　（カブトに）そして、この十字路に来たのよ。
ウラシマ　今日は本当に助かったよ。予算はかなりオーバーしたけど。

ナナコ　ねえねえ、私にはプレゼントはないの？
ウラシマ　おまえのおかげで、財布は空っぽだ。だから、また今度。
ナナコ　そう言って、一度もくれたことないじゃない。
ウラシマ　何度も写真をやっただろう？　僕が撮った大傑作を。
ナナコ　鳥の写真なんて、つまらない。
ウラシマ　つまらないとはなんだ。テントを立てて、毛布を被って、何日も徹夜して撮った写真ばっかりなんだぞ。
ナナコ　そうだ。この時計、ちょうだい。
ウラシマ　ダメダメ。
ナナコ　いいじゃない。恩返しだと思って。
ウラシマ　何だよ、恩返しって。
ナナコ　今まで、いろいろ助けてきたでしょう？　ノートを貸したり、授業の代返をしたり。
ウラシマ　何かしてもらうたびに、食事を奢ったじゃないか。
ナナコ　じゃ、今日も奢ってくれる？
ウラシマ　ごめん、今日はあいつが家で待ってるんだ。そうだ。正月に家に来いよ。何でも好きなものを食わせてやるから。
ナナコ　新婚家庭に行くの？
ウラシマ　あいつはあんまり料理が得意じゃないから、僕が作るよ。冬はやっぱり鍋物だよね。そうだ、あいつはおでんが好きなんだ。
ナナコ　この時計、ちょうだい。
ウラシマ　待てよ。車が来るぞ。
ナナコ　いいから、ちょうだい。

ウラシマ　バカ、危ない！（ナナコの腕をつかむ）

車が激しくスリップする音。車と人が衝突する音。ナナコとウラシマが飛ぶ。そして、倒れる。やがて、ウラシマがゆっくりと立ち上がる。

ナナコ　（体を起こして）あの人が立ち上がったのは、ちょうどあの辺りだった。カブト、カメラを貸して。

カブト　私がナナコにカメラを渡そうとした時――――

ウラシマ　待てよ、ナナコ。

カブト　ウラシマさんがやってきたのです。

クサナギ　ちょっと待て。ウラシマさんはさっきからいたじゃないか。

カブト　いませんでした。

クサナギ　十五年前の話を、ナナコとしてたじゃないか。

カブト　あれは、ナナコの回想の中のウラシマさん。

クサナギ　そして、今度は現実のウラシマさん？　全然、区別がつかないよ。

カブト　仕方ないよ。私たちには十五年前でも、二人にはたったの十五日しか経ってないんだから。

ナナコ　カブト、カメラを貸して。

クサナギ　その前に時計を返してくれ。

ナナコ　カブト。

ウラシマ　ナナコ、頼む。

ナナコ　イヤだ。

ウラシマ　あいつに渡したいんだ。僕らが一緒にいたのは、時計を買うためだったって、

ナナコ　説明したいんだ。
ウラシマ　昨日会って、わかったでしょう？　話なんか、聞いてくれないわ。
ナナコ　時計を渡せば、わかってくれる。
ウラシマ　言い訳としか思わないわ。
ナナコ　心を込めてプレゼントすれば、わかってくれるんだろう？
ウラシマ　何を言ってるのよ。選んだのは私よ。
ナナコ　頼んだのは僕だ。さあ、返してくれよ。
ウラシマ　持ってない。
ナナコ　どこへやった。
ウラシマ　捨てたのよ、あんなもの。
ナナコ　それなら、それでいい。時計なんかなくたって、ナナコが一緒に来て、話をしてくれれば。
ウラシマ　私が行ったら、余計に怒らせるだけよ。
ナナコ　ナナコのこともわかってくれるよ。
ウラシマ　わからないわよ。どうしてだと思う？　あんたが何もわかってないからよ。
ナナコ　彼女の気持ちも、私の気持ちも。
ウラシマ　ナナコの気持ち？
ナナコ　私だって、プレゼント、一度でいいから、ほしかったのよ。

ナナコが走り去る。

ウラシマ　あんな高い時計、二つも買えないよ。
カブト　バカだな。女の子の気持ちが全然わかってないんだから。

ウラシマ　気持ちって、何だよ。
カブト　それくらい、自分で考えろ。
ウラシマ　君だって、わからないんじゃないの？
カブト　私はわかるよ。私だって、女の子だもん。
ウラシマ　え？　君、女の子だったの？
カブト　しらじらしいなあ。あんたの名前、ウラシマじゃないよね？
ウラシマ　どうしてそう思うんだ？
カブト　私の父さんも十五年前に死んだんだ。私が生まれる前に。
ウラシマ　君のお母さんの名前は？
カブト　ムロマチアカネ。
ウラシマ　アカネさんが、こんな男と結婚すると思うかい？
カブト　あの人の趣味、変わってるから。それに、あんたもプロのカメラマンだろう？
ウラシマ　母さんと同じ仕事じゃないか。
　僕はウラシマだよ。ウラシマタロウ。乙姫様を一人残して、地上に帰っちまったんだ。

ウラシマが歩き出す。カブトが後を追う。が、振り返って、十五年前のウラシマが立ち上がった場所に、カメラを向ける。フラッシュ。ウラシマがカブトに声をかける。ウラシマ・カブトが去る。

ムロマチがやってくる。

ムロマチ　乙姫様は、どうして玉手箱を渡したのだろう。蓋を開けると真っ白い煙が吹き出して、開けた人間を老人にしてしまう箱。そんな恐ろしい箱を、どうして浦島に渡したのだろう。私が出した答えはこうだ。乙姫様は浦島を愛していた。それなのに、浦島は故郷へ帰ると言い出した。乙姫様を残して。そんな男を許せるはずがない。乙姫様は怒り狂った。そして、浦島への復讐を誓った。棄てるなら、棄てるがいいわ。そのかわり、戻りたくなっても、戻れないようにしてやるからね。玉手箱の中には、乙姫様の悲しみが封じ込められていた。その悲しみが、浦島を老人にしたのだ。老人になれば、二度と海には潜れない。龍宮城にも戻れない。しかし、一つだけ疑問が残る。浦島が蓋を開けずに、玉手箱を捨てたら、どうするつもりだったのか。浦島はもう一度、海に潜るだろう。その時、乙姫様は龍宮城の門を開けるだろうか。別れた時の姿で、あの人が戻ってきたら。

そこへ、アヅチ・モモヤマがやってくる。

アヅチ　先生、カズコ君の担任の先生が、今すぐ学校に来てほしいと。

ムロマチ　おまえらじゃダメだって言われたのか。
モモヤマ　そうじゃなくて、カズコ君がいなくなったんです。昨日会ったナナコって幽霊と、どこかへ行ってしまったらしいんです。
ムロマチ　幽霊とは仲良くなるなって言ったのに。
モモヤマ　先生、ナナコって、ご主人とどういう関係ですか？
アヅチ　バカ。そんなこと、聞くな。
モモヤマ　でも、気になるじゃないか。ご主人は「一緒に死んだ」って言ってたし。
ムロマチ　同級生だよ、大学時代の。
モモヤマ　ということは、ただの友達か。でも、ただの友達がどうして一緒に死んだんですか？
アヅチ　そんなこと、聞かなくてもわかるだろう。
モモヤマ　おまえにはわかるのか？
アヅチ　恋人だったんだよ。ご主人は先生と結婚してからも、ナナコと付き合ってたんだ。でも、それが先生にバレてしまった。先生は「私を取るの？　ナナコを取るの？」と迫った。もちろん、ご主人はナナコを取った。二人は逃げた。先生は包丁を持って、追いかけた。そして――――

モモヤマ　先生、あなたはなんてむごいことを。
ムロマチ　アヅチ君、冗談はそれくらいにしてくれ。モモヤマ君が本気にする。
モモヤマ　え？　今のは嘘なんですか？
アヅチ　途中までは本当だ。しかし、まさか浮気の最中に死ぬとはな。迷惑にもほどがある。
モモヤマ　カズコ君はそのことを知ってるんですか？
ムロマチ　何も話してない。死んだ時のことも、父親がどんな男だったかも。

アヅチ　聞いたら、ショックでしょうからね。
モモヤマ　でも、いつかは知りたいと思うんじゃないかな。自分の父親なんだから。
アヅチ　何が父親だ。ご主人は、カズコ君が生まれる前に死んだんだぞ。先生は、カズコ君を一人で産んで、一人で育てて来たんだ。それがどれだけ大変なことか、おまえにわかるのか？
モモヤマ　先生は今でも許してないんですね？　ご主人のことを。
ムロマチ　それで、担任はなんて言ってたんだ。
アヅチ　実は、カズコ君の他に、アゲハって子もいなくなりまして。二人を探すのを手伝ってほしいと。
ムロマチ　もうすぐ日が暮れる。待ってれば、そのうち帰ってくるだろう。
モモヤマ　でも、カズコ君にもしものことがあったら、どうします？
ムロマチ　あの女、どこまで人に迷惑をかければ、気が済むんだ。

ムロマチ・アヅチ・モモヤマが去る。カニタニ・サルサワ・ウスイケがやってくる。手には、たくさんの本。

カニタニ　どうして私たちがやらなくちゃいけないわけ？
ウスイケ　ムロマチさんとオオシマさんが行方不明なんだって。ミドリ先生、「近所を探してくる」って言ってた。
カニタニ　探すことなんかないんだよ。怒られるのがイヤで、逃げたんだから。
サルサワ　暗くなってきたね。
ウスイケ　今日も出るかな。
カニタニ　全部終わったってことにして、帰らない？

ウスイケ　でも、まだ半分もやってないのに。
カニタニ　あいつらにやらせればいいんだよ。大体、この仕事は、プールの水を抜いた罰だろう？
サルサワ　私たちがやることないのよ。私たちだって、被害者なんだから。
カニタニ　帰ろうか。
サルサワ　ウスイケさん、後はよろしく。
ウスイケ　せめて、ミドリ先生に一言言ってから帰ろうよ。

そこへ、アゲハがやってくる。手には一冊の本。

アゲハ　さよなら。
カニタニ　さよならじゃない！　どうしておまえがここにいるんだ。
サルサワ　先生たち、みんなであなたのこと、探してるのよ。
アゲハ　そうなの？　私は朝からずっとここにいたのに。
カニタニ　（時計を示して）もうすぐ七時だぞ。十時間以上も何をしたんだ。
アゲハ　この本を読むのに、夢中になっちゃって。まさか、そんなに時間が経ってるとは思わなかった。
ウスイケ　それ、何て本？
アゲハ　おもしろいのよ。読んでみる？
カニタニ　私は本が大嫌いなんだ。細かい字がビッシリ並んでるのを見ると、ジンマシンが出てきて。
アゲハ　この本なら、大丈夫だと思う。ほら、見て。（差し出す）
カニタニ　（受け取って）何だよ、これ。真っ白じゃないか。

アゲハ　何も考えないで、開くからよ。夏休みに関係あることを、頭に思い浮かべながら開くの。海とか川とかプールとか。

カニタニ　そうだな。たとえば、小学校の時、おばあちゃんの田舎で見た、ホタル。

カニタニが本を開く。本が黄色く光る。周囲に、虫の音が広がる。

カニタニ　（本を閉じて）何だよ、この本！

アゲハ　おもしろいでしょう？　頭に思い浮かべたものが、何でも映るのよ。

カニタニ　偶然、ホタルのページを開いただけじゃないのか？（開いて）あれ？　みんな、真っ白だ。

アゲハ　（本を取って）次はサルサワさん。（差し出す）

サルサワ　（受け取って）私は花火。小学校の時、お父さんに連れてってもらった、隅田川の花火大会。

サルサワが本を開く。本が七色に光る。打ち上げ花火が炸裂する音。

カニタニ　（本を閉じて）どういう仕掛けなんだよ、これ。

アゲハ　何の仕掛けもないみたい。いくら読んでも読み終わらない、終わりのない本なのよ。（本を取って）次はウスイケさん。（差し出す）

ウスイケ　（本を取って）私はね私はね、幽霊。

カニタニ　バカバカバカ！

ウスイケが本を開く。そこへ、ナナコがやってくる。

サルサワ　（本を見て）この人、一昨日会った人だ。
ウスイケ　あの人、幽霊だったの？
ナナコ　いたいたいた。
カニタニ　（ナナコを見て）出た出た出た！
ナナコ　ちょっとあんた、時計を返してくれない？
カニタニ　こっちへ来ないで！
ナナコ　何よ。まさか、ネコババするつもりじゃないでしょうね？
カニタニ　私にとりつこうったって、そうは行かないぞ。いざとなったら、この張り手で。
アゲハ　（本を取って）大丈夫よ。この人は何もしないから。
ナナコ　あら、幽霊を舐めてもらっちゃ、困るわ。
カニタニ　やっぱり、とりつく気だな？
ナナコ　もう半分とりついてるのよ。気がつかない？
カニタニ　まさか、いつの間に。
ナナコ　どうして時計を渡したと思ってるの？　その時計を入り口にして、あんたの体の中に入るためよ。スルッ、グニュグニュグニュって。
カニタニ　汚いぞ！（時計を外す）
ナナコ　投げるな！　投げると死ぬよ！
カニタニ　やめろ！
ナナコ　静かに下に置いて。そこから十歩下がって。はい、いい子だね。今日のところは勘弁しといてやろうか。（時計を拾う）
カニタニ　ありがとう。このご恩は一生忘れません。

アゲハ　でも、この本には、幽霊は恨みのある人にしかとりつかないって書いてあるよ。
ナナコ　やっぱり？
カニタニ　さては、騙したのか？
ナナコ　ごめんね。そう言わないと、返してくれそうもなかったから。
カニタニ　悪いことをしたら、罰を受けなくちゃね。
ナナコ　罰って何？
カニタニ　（右手を振り上げて）歯を食いしばれ！
ナナコ　やめて。これ以上、顔が腫れたら、お嫁に行けなくなっちゃう。
カニタニ　心配するな。おまえはもう死んでいる。

ナナコが走り去る。後を追って、カニタニ・サルサワ・ウスイケが走り去る。

アゲハ　凄い本ね。『ナツヤスミ語辞典』

そこへ、ナナコが戻ってくる。

ナナコ　この本も返してね。（本を取る）
アゲハ　ちょっと、その本はうちの学校の。
ナナコ　よく見てよ。エンゼルマーク。この本は、天国の図書館で借りたの。
アゲハ　ちょうだい。
ナナコ　あなたはいらないでしょう？　あなたはもう持ってるんだから。
アゲハ　持ってないよ。

ナナコ　　何言ってるの。夏休みの真っ最中のくせに。

ナナコが去る。後を追って、アゲハが去る。

クサナギ　「私とウラシマさんは、二人でナナコを探しました。駅、デパート、本屋、公園。ナナコが行きそうな場所は全部行ったけど、全部空振り。そのうち、日が暮れてきたので、仕方なく、学校に向かいました。街灯に照らされた校門まで来ると、背後から叫び声。振り返ると、般若のような顔をした女がこっちに走ってくる。『口裂け女だ！』。私たちは思わず逃げ出しました」

カブト・ウラシマが飛び出す。後を追って、ミドリ先生・モモヤマが飛び出す。

ミドリ先生　待ちなさい、ムロマチさん！
カブト　何だ、ミドリ先生か。脅かさないでくださいよ。
ミドリ先生　こっちに来なさい。その人から、離れるのよ。
モモヤマ　（カブトに）今までどこに行ってたんだ。僕たち、みんなで探してたんだぞ。
カブト　駅前の十字路だよ。そこで、ウラシマさんに会って。
ミドリ先生　いいから、来なさいってば！（カブトの手を引っ張って、ウラシマに）この子はまだ中学生です。とりつくなら、私にとりつきなさい。さあ。
ウラシマ　いや、僕は別にとりつくつもりなんか。
ミドリ先生　それなら、さっさとあの世へ帰りなさい。早く。
ウラシマ　残念ながら、まだ帰れないんです。やらなくちゃいけないことがあるんで。

カブト　でも、ナナコがいないよ。時計もないし。
ウラシマ　そうだった。
ミドリ先生　ムロマチさん、もう話をしちゃダメ。
カブト　あと一分だけ。
ミドリ先生　ムロマチさんもヤマダさんも、先生の言うことを全然聞いてくれないんだから。先生は、あなたたちのためを思って言ってるのに。
モモヤマ　だったら、あと一分だけ、話をさせてやってくれませんか。
ミドリ先生　いいえ。これ以上、勝手な行動は許しません。急いで職員室へ行って、迷惑をかけた人たちに謝るんです。
モモヤマ　そう言わずに、お願いします。カズコ君のことを、本当に思っているなら。
ミドリ先生　でも……。
モモヤマ　（カブトに）じゃ、僕は先生を呼んでくる。（ウラシマに）先生が来るまで、必ずここにいてくださいよ。

モモヤマが去る。

カブト　ウラシマさん、ナナコが死んだ時のこと、覚えてる？
ウラシマ　覚えてるよ。僕はトラックに撥ねられて、五メートルも跳んだんだ。
カブト　どこに落ちたの？
ウラシマ　あの日はひどい大雪でね。車道の端には、雪が二十センチくらい積もってた。その雪の上に。
カブト　じゃ、顔は潰れなかったんだね？
ウラシマ　目を開けることができたんだから、潰れてなかったんだろう。とにかく、ナ

カブト　ナコのことが心配で、すぐに起きて、辺りを見回したんだ。
クサナギ　立ったんだね？　両目を開けて、雪の上に立ったんだね？
（写真を見て）立ってるよ。おでこに右手を当てて、ちょっぴり悲しそうな顔をして。
カブト　写ってるよね？
クサナギ　写ってるさ。
カブト　（カメラを見て）写ってるよ。きっと写ってる。
ウラシマ　そのカメラ、君のじゃないだろう？
カブト　私のだよ。今日から、私のものになったんだ。
ウラシマ　ということは、一昨日の時点では、君のじゃなかった。
カブト　昨夜、母さんにもらったんだ。
ウラシマ　やっぱりね。
カブト　どうしてそう思ったの？
ウラシマ　昔、それと同じカメラを使ってたんだ。そのカメラで、鳥を撮ってたんだよ。
カブト　このカメラで？
ウラシマ　そのカメラじゃないさ。僕のカメラは十五年も前のものだ。僕が死んだ後、誰かの手に渡ったとしたら、今頃はボロボロになってるはずだ。
カブト　母さん、このカメラは大事にしてたんだ。一番古いカメラだからって。
ウラシマ　いいものをもらったじゃないか。大事に使えよ。
カブト　ウラシマさん。
ウラシマ　さあ、もう行けよ。一分て約束だったじゃないか。
カブト　ウラシマさん。
ミドリ先生　ムロマチさん、もういいでしょう？

カブト　（ウラシマに）銀河鉄道って、どこに止まるの？　校庭？
ウラシマ　校庭だと埃が凄いだろう？　だから。（と指さす）
カブト　屋上？
ウラシマ　見送りには来るなよ。来たら、一緒に連れてっちゃうぞ。
ミドリ先生　それが目的だったんですか？
ウラシマ　違いますよ。
ミドリ先生　行きましょう、ムロマチさん。
カブト　さよなら、ウラシマさん。
ウラシマ　さよなら、カズコ。いい写真、撮れよ。

カブト・ミドリ先生が去る。

ウラシマ　ナナコもいないし、時計もない。でも、話だけはしなくちゃ。

そこへ、駅長がやってくる。

駅長　よかった。間に合いましたね。
ウラシマ　僕は切符を持ってないんですけど、乗せてもらえるんですか？
駅長　もちろんですよ。そのかわり、天上に戻ったら、すぐに裁判です。神様に無断で、地上に戻るなんて、とんでもない重罪だ。百五十年前に、あなたと同じことをした人がいましたが、その人の罰は天使学校のトイレ掃除でした。
ウラシマ　それだけでいいんですか？
駅長　トイレは全部で一万もあるんですよ。その人は、いまだに掃除し続けている

ウラシマ　そうです。
駅長　何だか、戻るのがイヤになってきました。
私は別に構いませんよ。そのかわり、あなたは永遠に地上をさまようことになりますが。
ウラシマ　頑張ります。トイレ掃除。
駅長　お連れの方はどうしました？
ウラシマ　やっぱり、まだ戻ってきてないんですか？
駅長　ええ。残念ですが、置いていくしかないようですね。
ウラシマ　え？　でも、発車まで、まだ三時間もあるのに。
駅長　台風が近付いてるんですよ。ほら、風が強くなってきたでしょう？
ウラシマ　でも、空はあんなに晴れてる。
駅長　午前零時には真っ黒になりますよ。今夜の発車は、三時間繰り上げになりました。
ウラシマ　あと何分ですか？
駅長　十分です。
ウラシマ　そんな。ナナコを置いていくわけには行きません。

そこへ、ムロマチ・アヅチ・モモヤマがやってくる。

モモヤマ　あれ？　カズコ君は？
ウラシマ　ミドリ先生と職員室に行きました。
ムロマチ　カズコと一緒にいたっていうのは本当か？
ウラシマ　ああ。駅前の十字路で、偶然会ったんだ。

ムロマチ　話したのか、あんたのこと。
ウラシマ　そんなことするわけないだろう？　僕は、あの子が生まれる前に死んだんだ。
今さら、父親だなんて名乗る資格はない。
ムロマチ　カズコには二度と近付くな。
ウラシマ　その心配はいらないよ。僕は、今夜の列車で帰るんだ。
ムロマチ　だったら、いいんだ。行くぞ、アヅチ、モモヤマ。
ウラシマ　待ってくれ、アカネ。
ムロマチ　カズコはたくさんの人に迷惑をかけた。急いで、謝りに行かないと。
ウラシマ　その前に、僕の話を聞いてくれ。頼む。
アヅチ　行こう、モモヤマ君。
ムロマチ　待て。私も行く。
アヅチ　その必要はありません。謝るだけなら、僕ら二人で十分です。
モモヤマ　カズコ君のことは僕らに任せて、先生は先生の真実を見つけてください。
ムロマチ　カッコつけるな、バカ！

アヅチ・モモヤマが去る。

ウラシマ　アカネ、黙って先に死んで、済まなかった。おまけに、ナナコなんかと死んだりして。でも、ナナコはただの友達なんだ。
ムロマチ　友達？
ウラシマ　大学時代の同級生さ。本当にただの同級生で、おまえが想像してるようなことは、何もなかったんだ。
ムロマチ　私が何を想像したって言うんだ。

ウラシマ　だって、おまえ、怒ってるじゃないか。カズコにも僕のこと、話してないし。
ムロマチ　あんたに何がわかる。
ウラシマ　アカネ。
ムロマチ　私は一人になったんだ。一人でカズコを産んで、一人で育てたんだ。
ウラシマ　それは、本当に悪かったと思ってる。でも、ナナコとは本当に何もなかったんだ。
ムロマチ　そんな話、誰が信じると思う。
ウラシマ　誰も信じなくていい。でも、おまえだけには信じてほしい。あの日は、クリスマスのプレゼントを買いに行ったんだ。おまえのための。でも、僕が選んだら、気に入ってもらえないかもしれないだろう？　だから、ナナコに協力を頼んで。
ムロマチ　事故の時、あんた、何も持ってなかったじゃない。
ウラシマ　ナナコが持ってたんだよ。持ったまま、天国に来ちゃったんだ。それで、十五年も遅くなったけど、おまけにクリスマスでもないけど、おまえにプレゼントを渡すために、ここへ戻ってきたんだ。
ムロマチ　何を。
ウラシマ　それが、ナナコに持ち逃げされちゃって。

そこへ、ナナコがやってくる。

ナナコ　時計よ。私が選んだんだから、絶対に気に入るよ。
ウラシマ　ナナコ。
ナナコ　ほら、自分で渡しなさいよ。（時計を差し出す）

ウラシマ　（受け取って、ムロマチに）メリークリスマス。十五年も遅れて、ごめん。
（差し出す）
駅長　そろそろ列車が到着しますよ。急いで、屋上に上がってください。
ナナコ　今、行きます。
ウラシマ　（ムロマチに）受け取ってくれないかな？
ナナコ　（ムロマチに）受け取りなさいよ。自分の亭主が信用できないの？
ムロマチ　バカ。信用してたよ。（時計を受け取り、自分の時計を外して）これ、返すよ。十五年も借りっぱなしだったけど。（と差し出す）
ウラシマ　（受け取って）まだ使ってたのか？
ムロマチ　一日で五分も遅れるよ。でも、外すと、手首がスースーして、気持ち悪いから。
ウラシマ　アカネ。
駅長　ほらほら、もう見えてきましたよ。
ナナコ　行こう、ムロマチ君。
ウラシマ　アカネ。
ナナコ　名残を惜しむんじゃないの。どうせ四十日も待ってれば、会えるんだから。
ウラシマ　そうか！
ナナコ　でも、その時はおばあちゃんだけどね。
ムロマチ　うるさいよ、バカ。
ナナコ　さあ、行こう。
ウラシマ　さよなら、アカネ。カズコによろしく。
ムロマチ　伝えないよ、カズコには。
ウラシマ　それでもいいよ。そう言いたかっただけなんだ。さよなら。

ウラシマ・ナナコ・駅長が去る。

ムロマチ　乙姫様の気持ちがわかった。きっと今でも、浦島太郎の帰りを待ち続けてるんだ。

カブトがやってくる。空を見上げる。

カブト　銀河鉄道だ！

銀河鉄道の蒸気の音。ヤンマ・アゲハ・アヅチ・モモヤマ・ミドリ先生・アオタ先生・カニタニ・サルサワ・ウスイケ・ヤンマの母・アゲハの母・郵便屋がやってくる。空を見上げる。

カブト　クサナギ先生、その写真の意味がわかりますか？　そこに写ってるのは誰ですか？　母さんは何も言いません。そのかわり、私がアルバムを作るのを許してくれました。最初のページには、その写真を貼りました。クサナギ先生、そこに写ってるのは誰ですか？　私は私のカメラで、真実を写したのでしょうか？

クサナギが立ち上がる。

クサナギ　それは僕にもよくわからない。君の真実は君だけのものだ。でも、僕にだっ

て、わかったことがあった。君たちの手紙が教えてくれた、僕だけの真実。玉手箱は開けちゃいけない。せっかく、終わらない夏休みが始まったんだ。終わらないかもしれないものを、自分の手で終わらせちゃいけない。ヤンマ、アゲハ、カブト、君たちの玉手箱は、海の彼方へ放り投げろ。僕の夏休みだって、まだまだ始まったばかりだ。

クサナギが手紙を引き裂き、空に撒く。満天の星の中へ、銀河鉄道が消えていく。

＜幕＞